

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Basic study on the relation between social structure and language (3) : Temperament vocabulary and outlook on value

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001296

国立国語研究所報告 47

社会構造と言語の関係についての
基礎的研究 (3)

性向語彙と価値観

渡 辺 友 左

国立国語研究所

1973

国立国語研究所報告 47

社会構造と言語の関係についての
基礎的研究 (3)

性向語彙と価値観

渡 辺 友 左

国立国語研究所

1973

刊 行 の こ と ば

当研究所の第二資料研究室が昭和40年度から行なってきた「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」のうち、性向語彙と価値観の関係についての調査が一部まとまったので、ここに報告書として刊行する。

この調査は、同研究室の渡辺友左が担当した。青年層と中・老年層のふびとを対象にアンケートによる意識調査を試みたものである。このうち青年層の調査については、日本大学教授松尾拾氏・東京外国語大学教授鈴木幸寿氏・東京都立大学助教授大島一郎氏・共立女子大学助教授蜂谷清人氏・お茶の水女子大学付属小学校教諭大橋富貴子氏の協力を得た。また、中・老年層の調査については、国語学・国語教育学の専門研究者を含む一般社会人159名の方がたの協力を得た。記して感謝の意を表する。

昭和47年9月

国立国語研究所長 岩 淵 悦 太 郎

目 次

刊行のことば

まえがき	1
性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造の 関連についての調査研究(1)	3
I セックスに関する形容詞性向語彙の場合	3
1 1回目の調査の実施とその集計結果	3
2 「不貞」「貞淑」「貞節」の3語についての辞書の意味記述	12
3 性的な態度・振舞についての価値観	17
4 性向語彙の構造と性向についての価値観の構造と	21
5 2回目の調査の実施とその集計結果	25
5.1 調査票	25
5.2 調査対象と調査年月	28
5.3 調査結果	31
5.31 「不貞な」「貞淑な」「貞節な」の3語について	31
5.32 「はすっぱな」など24語について	36
(a) 男×?の多い語	36
(b) 男×?と男女○の多い語	40
(c) 女×?の多い語および女×?と男女○の多い語	40
(d) 男女○の多い語	48
(e) その他の語	48
5.33 まとめ	52
II 言語活動に関する形容詞的性向語彙の場合	59
1 調査票と調査の実施	59
2 調査の結果	63
3 まとめ	94

ま え が き

(1) この報告書は、国立国語研究所第四研究部第二資料研究室(室長飯豊毅一)が昭和40年度から研究している課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」のうち、渡辺が分担してきた仕事の一部を中間的にまとめたものである。

(2) 人間の態度や振舞・性格を評価記述するのに使う語、または、そのように評価記述される態度をとったり、振舞ったりする人間、ないしはそのように評価記述される性格をもっている人間を指し示すのに使う語の総体を性向語彙と呼ぶことにする。

この性向語彙の量的な構造や意味・用法の構造が性向についての社会的価値観の構造とどのようなかかわりあいをもっているか。渡辺は、この問題を研究室の統一課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」の一つのサブテーマとし、これに言語社会学の立場から迫ろうとしている。まず手はじめに、(1)セックスと(2)言語活動に関する形容詞(的)性向語彙だけをとりあげ、青年層と中・老年層の二つの世代にアンケート調査を実施した。本報告書は、このアンケート調査の概要を記述したものである。多忙な時間を割いて、アンケートに回答をお寄せくださった多くの方がたにここに改めて心からお礼を申し上げます。なお、青年層の調査にあたっては、松尾拾(日本大学教授・国語学)・鈴木幸寿(東京外国語大学教授・社会学)・大島一郎(東京都立大学助教授・国語学)・蜂谷清人(共立女子大学助教授・国語学)の各氏から特別の御配慮をいただいた。これについても、ここに改めて厚くお礼を申し上げます。

(3) この報告書で、セックスに関する形容詞性向語彙の第1回の調査に関する部分は、『社会学論叢』第49号(日本大学文理学部社会学研究室 昭和45年7月)にのせた小論「語彙の構造と価値観の構造と——言語社会学的な研究の試み——」を一部書き改めたものである。

(4) 研究室の課題について、これまでに、渡辺の分担部分を中間的にまとめたものとしては、この報告書のほかに、次の三つがある。

A 「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系」(国立国語研究所論集 3『ことばの研究』昭和42年3月)

B 『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)』（国立国語研究所
報告32 昭和43年3月）

C 『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)』（国立国語研究所
報告35 昭和45年2月）

(5) 上記の報告(A)で福島北方方言の形容詞・形容動詞の語彙体系を記述した際、そこでのこした課題について次のように述べた。

たとえば、人間の感情を表わす形容詞・形容動詞は、プラス(快)とマイナス(不快)のどちらの感情を表わす単語が多いか。同じように、人間の態度・行動・性格を表わす形容詞・形容動詞は、プラス・マイナス・ニュートラルいずれの評価の上に立ったものが多いかなどの問題も、形容詞・形容動詞の意味記述の上では興味ある問題であるが、これは、今後のわたしの課題とした。(上掲書P. 136)

この「今後のわたしの課題」としたものに対する調査研究の、いわばワンステップにあたるものがこの報告書である。

(6) アンケート調査の整理集計を進めるにあたって、臨時アルバイト川田千鶴子・奥山緑・小林春江の補助を得た。

性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造の関連についての調査研究(1)

I セックスに関する形容詞性向語彙の場合

1 1回目の調査の実施とその集計結果

上に掲げた研究課題の下で、わたしが何をやろうとしたか。それを知っていただくため、まずプリテストの形で実施した1回目の調査の内容を御覧にしたいと思う。

わたしどもの研究所の研究者と研究補助員あわせて55名(以下、これを「研究員グループ」と呼ぶ。)。それに日本大学文理学部でわたしと交渉のあった同学部社会学科4年の学生67名(以下、これを「学生グループ」と呼ぶ。)。この二つのグループに、次のようなアンケートに回答を依頼した。昭和44年10月のことである。

「チャーミングな人」と言った場合の「人」は、女性であって、男性でないのが普通です。反対に、「ハンサムな人」と言った場合の「人」は、男性であって、女性ではありません。つまり「チャーミングな女性」「ハンサムな男性」とは言えても、「チャーミングな男性」とか「ハンサムな女性」とは言えないのが普通です。

このように、ことばの中には、女性にしか使用しないものや、男性にしか使用しないものがあります。

そこで、次に人間の、性に対する態度や振舞(または、そのような観点から眺めた人間の性格)を評価する際に使うことばをいくつかあげました。(このほかにもれているものがありましたら、空欄の部分に書き足して下さい。ただし、形容詞・形容動詞およびそれらに類似したものに限り)この中に、世間では普通一般に女性にしか使わないことば、あるいは男性にしか使わないことばだと思えるものがありましたら、それぞれ下の欄にぬき

出して記入して下さい。

好色な みだらな 不品行な 不身持な けがらわしい すけべえな
エッチな ふしだらな 卑猥な わいせつな 淫猥な 淫乱な 淫蕩
な 淫奔な 不貞な はすっぱな 貞淑な 貞節な いかがわしい

このアンケートに対する研究員グループと学生グループの回答をそれぞれ①男女合わせて集計した場合と、②男女別に集計した場合の結果を示すと、次の第1表と第2表のようになる。

表中各欄の数字は、それぞれの語を女性（・男性）にしか使わないと答えた人が全体の何パーセントにあたるかを示す。ただし、0パーセントの欄は、見やすさを考えて、すべて空欄にしておいた。このパーセントを示す数字が大きい語ほど、女性（・男性）にしか使われないと意識されている傾向が強い、ということになる。

アンケート回答者の男女別数と平均年齢は下のとおりである。カッコ内数字は平均年齢。研究員グループの場合、男と女の間には平均年齢でちょうど10歳の開きがある。

	研究員グループ	学生グループ
	名	名
男	28 (37.5歳)	55
女	27 (27.5歳)	12
計	55 (32.5歳)	67

また学生グループは二十一、二歳のものがほとんど大部分だから、研究員グループの平均年齢との間には、男で15歳、女で5歳ぐらいの開きがあることになる。研究員グループの場合、男と女はほとんど同数であるが、学生グループの場合は男の数が女よりもぐんと多い。両者を全体として比較する場合は、このことに注意していただきたい。

この第1表と第2表からいくつかのことを知ることができる。

第1表 男女こみでみた場合

	研究員グループ		学生グループ	
	女性にしか 使わぬ	男性にしか 使わぬ	女性にしか 使わぬ	男性にしか 使わぬ
好色な(-)	%	23.6%	1.5%	22.4%
みだらな(-)	12.7		20.9	1.5
不品行な(-)	1.8	1.8	4.5	6.0
不身持な(-)	20.0	5.5	14.9	3.0
けがらわしい(-)	1.8	7.3	7.5	7.5
すけべえな(-)		47.3		52.2
エッチな(-)	1.8	27.3	4.5	19.4
ふしだらな(-)	20.0		28.4	3.0
卑猥な(-)		10.9		4.5
わいせつな(-)		9.1	1.5	14.9
淫猥な(-)	5.5	1.8	3.0	
淫乱な(-)	12.7		14.9	
淫蕩な(-)	3.6	9.1	3.0	11.9
淫奔な(-)	9.1		1.5	3.0
不貞な(-)	40.0		31.3	6.0
はすっぱな(-)	80.0		19.4	4.5
貞淑な(+)	87.3		41.8	1.5
貞節な(+)	72.7		19.4	4.5
いかがわしい(-)	7.3	3.6	6.0	1.5
無記入	3.6	43.6	26.9	38.8
プラス評価語の1語 平均パーセント	80.0	>	30.6	> 3.0
マイナス評価語の1 語平均パーセント	12.7	> 8.7	9.6	> 9.5
19語全体の1語平均 パーセント	19.8	> 7.8	11.8	> 8.8
回答者総数	55名	55名	67名	67名

第2表 男女別にみた場合

	研究員グループ				学生グループ			
	女性にしか使わぬ		男性にしか使わぬ		女性にしか使わぬ		男性にしか使わぬ	
	男%	女%	男%	女%	男%	女%	男%	女%
好色な(-)			10.7	*37.0	*1.8		20.0	*33.3
みだらな(-)	*14.3	11.1			20.0	*25.0	*1.8	
不品行な(-)	*3.6			*6.7	*5.5		3.6	*16.7
不身持な(-)	14.3	*25.9	3.6	*7.4	9.1	*41.7	*3.6	
けがらわしい(-)	*3.6		3.6	*11.1	*9.1		7.3	*8.3
すけべえな(-)			46.4	*48.1			49.1	*66.7
エッチな(-)		*3.7	17.9	*37.0	*5.5		16.4	*33.3
ふしだらな(-)	*21.4	18.5			27.3	*33.3	*3.6	
卑猥な(-)			10.7	*11.1			3.6	*8.3
わいせつな(-)			*10.7	7.4	*1.8		10.9	*33.3
淫猥な(-)	*10.7		*3.6		*3.6			
淫乱な(-)	*17.9	7.4			*18.2			
淫蕩な(-)	3.6	*3.7	*10.7	7.4	*3.6		10.9	*16.7
淫奔な(-)	*17.9				*1.8		1.8	*8.3
不貞な(-)	*53.6	25.9			*34.5	16.7	3.6	*16.7
はすっぱな(-)	*82.1	77.8			14.5	*41.7	*5.5	
貞淑な(+)	*100.0	74.1			*41.8	41.7	*1.8	
貞節な(+)	*85.7	59.3			*20.0	16.7	3.6	*8.3
いかがわしい(-)	*14.3		3.6	*3.7	5.5	*8.3		*8.3
無記入		7.4	50.0	37.0	29.1	16.7	43.6	16.7
プラス評価語1語平均パーセント	*92.9	66.7			*30.9	29.2	5.4	*8.3
マイナス評価語1語平均パーセント	*15.1	10.2	7.1	*10.2	9.5	*9.8	8.3	*14.7
19語全体の1語平均パーセント	*23.3	16.2	6.4	*9.2	11.8	11.8	7.7	*12.5
回答者総数	28名	27名	28名	27名	55名	12名	55名	12名

人間の、セックスに対する態度や振舞、または、そのような観点から眺めた人間の性格を評価する際に使う形容詞・形容動詞のたぐいのことば、つまり「——イ 態度」とか「——ナ 振舞」、または「アノ人ワ ——イ 人ダ。」とか、「アイツワ ——ナ 奴ダ。」などと評価した場合に、——の部分にはいることばにはいろいろなものがある。アンケートにかかげた一連のことばは、そのように用いられることばの候補である。

これらのことばの中には、「すけべえな」「エッチな」……………のように、おそらく仲間うちの会話の中で使われることが多いだろうと思われる俗語もある。また、「淫奔な」「淫猥な」「淫蕩な」……………のように、どちらかという小説の中などで使われることが多いだろうと思われる漢語もある。性格のちがうものが雑然といりまじっている。だが、セックスに対する人間の態度や振舞い、またはそのような観点から眺めた人間の性格を評価するのに使う形容詞・形容動詞のたぐいのことばは、一応これらの語で代表させることができるだろう。

そこで、今、上にあげた一群のことばをマイナスの評価をもって使うことが多いものと、プラスの評価をもって使うことが多いものとに分けてみると、前者のマイナスの評価をもって使うことが多いことばのほうが圧倒的に多いことがわかる。プラスの評価をもって使うことが多いのは、少なくともわたしの言語意識では、「貞淑な」「貞節な」の2語だけである。

つまり、セックスに対する人間の態度や振舞い、またはそのような観点から眺めた人間の性格を評価するのに使う日本語の形容詞・形容動詞の語彙は、プラスの評価よりもマイナスの評価をもって使う語のほうが圧倒的に多いという量的な構造をもっている。このことに、まず気づくのである。

第二に、これら一群の単語を、世間では普通一般に女性にしか使わないと答えたものと、男性にしか使わないと答えたものとに分けてみると、総じて、これらの語は女性にしか使わない、と答えているものの多いことに気づくだろう。

第1表を見ると、女性にしか使わないと答えた者が全体の10%をこえている語は、研究員グループの場合も、学生グループの場合も、次の8語である。(カッコ内数字は、前者が研究員グループ、後者が学生グループのもの。)

貞淑な (87.3%・41.8%), 貞節な (72.7%・19.4%), 不貞な (40.0%・

31.3%), はすっぱな (80.0%・19.4%), 不身持な (20.0%・14.9%), ふしだらな (20.0%・28.4%), みだらな (12.7%・20.9%), 淫乱な (12.7%・14.9%)

これに対して、男性にしか使わないと答えた者が全体の10%をこえている語は、研究員グループの場合、わずかに次の4語にすぎない。

すけばえな (47.3%)・エッチな (27.3%)・好色な (23.6%)・卑猥な (10.9%)

学生グループの場合も、次の5語にすぎない。

すけばえな (52.2%)・好色な (22.4%)・エッチな (19.4%)・わいせつな (14.9%)・淫蕩な (11.9%)

また、研究員グループの場合、「女性にしか使わない語」の記入欄が無記入であったものは、わずか3.6%であるのに、「男性にしか使わない語」の記入欄が無記入であったのは43.6%と、ほぼ全体の半数近くもあった。「男性にしか使わない語」を指摘することは、「女性にしか使わない語」を指摘するのに比して、はるかに困難であった、ということを示しているのであろう。(学生グループの場合も、「男性にしか使わない語」の記入欄が無記入であったものは38.8%、「女性にしか使わない語」の記入欄が無記入であったものは、26.9%で、前者のほうが多い。)

したがって、19語全体の平均でみると、研究員グループの場合、「女性にしか使わない」と答えたものの全体に対する比率は、1語平均19.8%であるのに対し、「男性にしか使わない」と答えたものの全体に対する比率は、1語平均わずかに7.8%であるに過ぎない、ということになる。(学生グループの場合も、前者が11.8%、後者が8.8%で、わずかではあるが、前者のほうが大きい。)

つまり、これら一群の単語は、男性だけの性的な態度・振舞いや性格を評価記述することよりも、女性だけの性的な態度や振舞い・性格を評価記述することに向けられたものだ。このように意識されている場合のほうが、より多いのである。とりわけこの傾向は、研究員グループの「貞淑な」「貞節な」「はすっぱな」の3語の場合に顕著である。これら3語を「女性にしか使わない」と答えた者は、全体の80%もしめている。これに対して、これら3語を「男性にしか

使わない」と答えたものは、ひとりもない。

いっぽう学生グループの場合、これら3語を「女性にしか使わない」と答えたものは、「貞淑な」が41.8%、「貞節な」と「はすっぱな」がそれぞれ19.4%と、研究員グループに比して、いずれも非常に少ない。そのうえわずかではあるが、「男性にしか使わない」と答えたものさえいる。

ことばの使いかたをめぐる、二つの回答者グループの間には、この点でもかなりのズレのあることがうかがわれる。（「不貞な」の場合も、これと似た傾向がある。）

第三に、第2表をみると、「女性にしか使わない語」「男性にしか使わない語」の意識が女性と男性とではかなり違うということに気づく。まず「貞淑な」「貞節な」「不貞な」の3語だけについてみよう。研究員グループの場合、「不貞な」を女性にしか使わないと答えたものは、男性では53.6%もあるのに、女性はわずかに25.9%しかいない。「貞淑な」を女性にしか使わないと答えているのは、男性が100%であるのに、女性は74%しかない。同じように「貞節な」を女性にしか使わないと答えているのは、男性が86%近くもあるのに、女性は60%弱しかないのである。（もちろん、これらの3語を男性にしか使わないと答えたものは、研究員グループの場合、男女ともにゼロである。）

つまりアンケートの結果は、「不貞な」「貞淑な」「貞節な」の3語は女性にしか使わない、もし男性に使ったら、それはことばの使いかたとしておかしい、と意識しているのは、概して女性よりも男性に多いことを示しているのだ。これを裏返しにしていえば、「不貞な」「貞淑な」「貞節な」の3語を男性に使ってもおかしくないと感じているのは、男性よりも女性に多いはずだ、という推測も成りたってくるだろう。（学生グループの回答は、研究員グループの回答と傾向がかなり違う。）

「不貞な」「貞淑な」「貞節な」の3語だけではない。第2表で、*印のついた数字が男女それぞれの欄でいくつあるかを見てもらいたい。*印は、その*印のついているほうの数値（パーセント）がそれに対応する異性の回答の数値（パーセント）よりも大きいということを示している。

研究員グループの場合、「女性にしか使わない」という欄で、*印のついて

いるのは、男性の回答では19語中12語もあるのに、女性の回答では同じ19語中わずかに3語しかない。学生グループの場合も、12対5で、男性の回答のほうが多い。つまり、この19語について、このような語は、「女性にしか使わない」と意識している傾向は、研究員グループの場合も学生グループの場合も、ともに女性よりも男性のほうが強いのだ。

いっぽう、「男性にしか使わない」という欄で、*印のついているものは、研究員グループの場合、男性の回答では19語中わずかに3語しかないのに、女性の回答では19語中8語もある。学生グループの場合も12対5で女性の回答のほうが圧倒的に多い。つまりこの19語について、このような語は男性にしか使わないと意識している傾向は、研究員グループの場合も学生グループの場合も、ともに男性よりも女性のほうが強いのである。

要するに男性は、このようなことばは、おれたち男性よりも女性に使う性質のことばであると意識し、女性はまた女性で、このようなことばは、わたしたち女性よりも男性に使うべき性質のことばだと意識している。その帰属をたがいに相手におしつけあっている。これが、これらのことばについての使用意識の実態なのである。

男性がセックスの対象として意識するのは、同性愛でない限り、常に女性である。同じように、女性もセックスの対象として意識するのは、男性であって、女性ではない。だから、アンケート調査でこのような結果が出てくるのは、ある意味では当然だといえるかも知れない。しかし、それでもセックスに関する形容詞性向語彙の用法をめぐって、男性と女性の間にはこのような意識のズレがあるということは、性的性向のありかたに関する価値観の問題としてやはり注目しておくべきことのひとつであろう。

第四に、研究員グループと学生グループの回答の欄には、かなり大きな違いのあることに気づく。このことについては、すでにこれまでの記述の中でもいくつかが触れてきているので、くり返さないが、次のことだけつけ加えておこう。

「はすっぱな」を女性にしか使わないと答えたのは、研究員グループの男性で82.1%、同女性で77.8%もあるのに、男子学生ではわずか14.5%、女子学生でさえ41.7%しかない。反対に、「はすっぱな」を男性にしか使わないと答え

たのは、研究員グループの場合、男女ともに一人もいなかったのに、男子学生では5.5%もいた。「不貞な」「貞淑な」「貞節な」の3語の場合も、学生グループの回答は、研究員グループの回答とはかなり大きく違っている。

2 「不貞」「貞淑」「貞節」の3語についての辞書の意味記述

ここで、「不貞」「貞淑」「貞節」の3語の意味用法を現代語辞典がどのように記述しているかを見てみようと思う。資料として使ったのは、次の4冊である。(関連語として「貞操」の意味用法の記述も併記する。)(以下、下線は渡辺。)

①岩波国語辞典(初版) 西尾実・岩淵悦太郎編

②明解国語辞典 金田一京助監修

③例解国語辞典 時枝誠記編

④広辞苑(第1版) 新村出編

不貞

①岩波 貞操を守らないこと。

貞操 女としての正しい操(みさお)。妻として操を守ること。また婦人が性的関係の純潔を保つこと。

②明解 妻としての貞操の正しくないこと。

③例解 「貞淑」の対) 夫(おと)に対して妻としての務をしないこと。

妻が操(みさお)を正しく守らないこと。「——の妻」「夫に——を働く」

④広辞苑 貞操を守らないこと。

貞操 ①女の正しいみさお。女子の節操。②異性関係の純潔を保持すること。みさおの正しいこと。

貞淑

①岩波 女性の操(みさお)がかたく、しとやかなこと。

②明解 貞操がかたくて、しとやかなこと。

貞操 ①正しいみさお。②(婦人が)性的関係の純潔を保持すること。

③例解 夫に対して忠実で、女らしくてしとやかなこと。「——の(な) 夫人(妻)」「彼女は——の聞えが高い」

④広辞苑 女性のみさおがかたくて、しとやかなこと。

貞節

①岩波 女子が操(みさお)を正しく守ること。

②明解 ただしい貞操。

③例解 妻が夫に忠実で、他の男に身や心を任せないこと。貞操。「——を守る」「——な(の)婦人」

これで見ると、岩波・明解・例解・広辞苑の四つの現代語辞典がともに「不貞」「貞淑」「貞節」の3語を、男性(・夫)ではなく、女性(・妻)の性的な態度や振舞、またはその観点からみた性格を評価記述する語としてとらえていることがわかる。

次に、時代をさかのぼって、幕末から明治初期にかけて、これらの語がどのような意味用法をもっていたかをJ・C・ヘボン(James Curtis Hepburn 1815~1911)の和英英和語林集成(A Japanese-English and English-Japanese Dictionary)によって見てみよう。

ヘボンの和英英和語林集成には、初版(慶応3年)・第2版(明治5年)・第3版(明治19年)の3種がある。まず「不貞」をみると、これは初版・第2版・第3版のどれにもなく、その代わりに「貞」という語が第2版と第3版に収録されている。記述は、次のとおりである。(以下、下線は渡辺。)

貞

第2版

TEI, テイ, 貞, Fidelity or obedience of a wife to her husband.

第3版

TEI, テイ, 貞, (misao) Fidelity or obedience of a wife to her husband:— jo. a virtuous woman.

「貞淑」は、初版から3版までのどれにもものっていないが、「貞節」は、次のように記述されている。

貞節

初版

TEI-SETSZ, テイセツ, 貞節, n. Female virtue. — wo mamoru.

第2版

TEI-SETSU, テイセツ, 貞節, n. Female virtue, or fidelity to a husband, — wo mamoru, Otto ye —.

第3版

TEISETSU, テイセツ, 貞節, n. Female virtue, or fidelity to husband:—wo mamoru. Syn. MISAO.

ついでに、「みさお」と「貞操」の項をみると、次のようになっている。

みさお

初版・第2版

MISAO, ミサホ, 操, Chastity, virtue or fidelity of a widow to her deceased husband.—wo mamoru, to preserve chastity.—wo kudzusu, to fall from chastity by marrying again. Syn. SESSO.

第3版

MISAO, ミサホ, 操, n. Honor, chastity, virtue, fidelity of wo-
man:—wo mamoru, to preserve virtue;—wo kuzusu,
to fall from chastity Syn. SESSO.

貞操

第3版（初版・第2版にはなし）

TEISŌ, テイサウ, 貞操, (misao) n. Female virtue.

以上のとおり、ヘボンの和英英和語林集成においては、人間の性的な態度・振舞や性格をプラスの立場から評価するのに使う「貞」「貞節」「みさお」等の語は、すべて女性または妻にかかわるものとして記述されているのである。

和英英和語林集成の第3版の刊行に少しおくれて、次のようないくつかの国語辞書が出版された。

高橋五郎編 和漢雅俗いろは辞典 初版明治21年 増訂4版明治32年

山田美妙編 日本大辞書 初版明治25年 第7版明治29年

大槻文彦編 言海 初版明治24年 第200版明治42年

この3冊の辞書に前記の語とそれに関連のある語をあたってみた。以下、下線の部分に注意してほしい。

和漢雅俗いろは辞典

不貞 見出語になし

貞淑 見出語になし。

ていせつ (名) 貞節, 貞操 (婦徳をいふ), みさを。

みさを (名) 操, 賢操, 貞操, 清操, 節操, おこなひただしきこと (重に婦人に謂ふ)

ていさう (名) 貞操, みさを, 貞烈。

ていれつ (形名) 貞烈, みさをただしきこと (婦女にいふ), みさを。

せっさう (名) 節操, みさを (男女に通じて用ふ), 德行, かはらぬころ。

日本大辞書

不貞・貞淑・貞節 ともに見出語になし。

てい (貞) ミサヲ (女ノ) 「貞操」。

ていさう (貞操) 漢語。女ノミサヲ＝貞節。

みさを (操) [ときは常葉] みさを (真青の義)。節操＝貞操＝節。

言海

不貞・貞淑 ともに見出語になし。

ていせつ (名) 貞節, ヲンナノミサヲ。貞操。

てい う (名) 貞操, ヲンナノミサヲ。貞節。

みさを (名) 操, 節義, [身竿ノ義ニテ, 志行ノ直立ノ意カト云或云, ^{トキ}常葉^ミ真青ノ意カト] 固ク志ヲ守リテ変ヘヌコト。崩レヌヤウニ心ヲツクルコト。タシナムコト。

せっさう (名) 節操, ミサヲ。

この「言海」の増補版である「大言海」(昭和7—12年)では、次のようになっている。

大言海

ふてい (名) 不貞, 妻トシテ操ノ正シカラヌコト。貞操ヲ守ラヌコト。越絶書 (漢, 袁康) 「衛女不貞, 衛士不信」

ていしゆく (名) 女子ノ^{ミサヲ}節操, 堅クシテ, 容子ノシトヤカナルコト。

ていさう (名) 貞操 ヲンナノ, タダシキミサヲ。貞節。節操。

ていせつ (名) 貞節 ヲンナノタダシキミサヲ。貞操。節操。

せっさう (名) 節操 ミサヲ。節義ヲ堅ク操ルコト。

最後にもう一つ、大正の年代にはいつから出版された「大日本国語辞典」(上田万年・松井簡治編 初版大正4年 新装版再版昭和28年)では、次のようになっている。

大日本国語辞典

ふてい不貞 貞操を守らざること。夫に仕ふる道を尽くさざること。

ていさう貞操 婦人のみさをただしきこと。女の節義。又、貞節。節操。

ていしゆく貞淑 婦人が志操正しくして善良なること。

ていせつ貞節 婦人のみさを正しきこと。女子の節義。貞操。

せっさう節操 節義を堅く操りて変ぜざること。みさを。貞操。貞節。

みさを操 ⊖固く守りて心を変へざること。一筋に立て通して曲げざること。

節操。節義。操守。貞操。貞節。(中略)

みさをたつ 立操 志を変へず。

みさをやぶる 破操 女子など、貞操をけがす。

3 性的な態度・振舞についての価値観

ことわざは、日本人が長年の生活の体験に即して創造したものであるから、それには日本人の生活の真実やものの考えかたの真実が反映されている。そこで、この日本のことわざの中から、やもめに関係あるものを集めてみると、次のようなものがある。

貞女、二夫に見えず。

貞女立てたし、間男したし。

若後家の薄化粧。

若後家のしげき寺参り。

石塔の赤い信女が子をはらみ。

桃栗三年後家一年。

二十後家は立つが、三十後家は立たぬ。

十八後家は立つが、四十後家は立たぬ。

後家と黒木は触って見ねば知れぬ。

後家の建てたる家多し。

男やもめに雑魚たかる。

男やもめと南瓜の蔓は、隣屋敷へ這いかかる。

男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲く。

こんな具合にことわざを列挙していくと、誰でも次のことに気づくだろう。

① やもめに関することわざは、男女の別を問わず、その性的な態度・振舞を題材としたものが多い。

② 男やもめに関したのものよりも、女やもめに関したものが圧倒的に多い。

つまりやもめに関する日本のことわざは、女やもめの性的な態度・振舞を題材にしたものが圧倒的に多いのである。これは、わたしたち世間の目が、男やもめの性的な態度・振舞よりも、女やもめの性的な態度・振舞のほうにより強く向けられてきていたからだ。

では、わたしたち世間の目が女やもめの性的な態度・振舞のほうに強く向けられてきたのは、なぜか。それは、わたしたちの、性的な態度・振舞について

の伝統的な価値観が女性の側にきびしく傾斜したものであったからだ、とわたしは思う。

明治25年に発行された文部省検定修身教科書『尋常小学修身書』（東久世 通禧著 副島種臣関 全4冊）は、当時全国に普及した修身教科書の一つであるが、その巻4には次のような文章がある。当時の義務教育は、小学4年までであったから、女の子は、わずかに9歳か10歳の年端もいかぬときに、すでにこのような花嫁教育・人妻教育を受けて、義務教育を終えていったのである。初歩的な「性教育」の可否が問題になっている現在の小学校教育と比べて、まさに隔世の感をいだかせるものといわねばならない。（以下、下線は渡辺。）

第8 女 訓

女子は、成長の後、他人の家にゆきて、夫にしたがひ、舅姑につかへ、常に、内ををさむるものなれば、何事も、すなほにして、やさしかるべし。又、すがた、かたちのうるはしきよりも、心ばへのすぐれたるを、よしとするものなれば、つねに、行儀をただし、たちる、ふるまひを、しとやかにして、よく、裁縫、料理の法などをおぼえ、客のもてなし、朝夕のいとなみなど、ふつつかならざるやう心がくべし。（中略）

諺に曰はく、貞女、兩夫にまみえず。と、およそ、女たるものは、一たび夫の
家にとつがば、これを、わが家とおもひて、舅姑に、孝養をつくし、身の終はる
まで、善く、夫に事ふべし。たとひ、いかなることありとも、あらためて、他人
に従ふべからず。これを貞操といふ。貞操は、女の道の第一なり。

あり磯こえ 外行く波の ほか心 われは思はじ 命死ぬとも

万葉集

また、明治33年に普及舎から発行された文部省検定修身教科書『新編修身教典』の高等小学校用巻2には、次のような教材も収録されている。明治のわが国家は、現在なら小学6年生である女の子にすでにこのような教育を与えていたのである。

第28課 婦 道

女は、其のうまれつき、しとやかにして、をとなしきものなれば、とりわけ、其の行を謹み、徳ををさめて、人の口のはにのらざらんことをつとむべし。

また、一度、とつぎて妻となりし後は、よく、夫及舅姑に事へ、子女を教へ、奴婢をあはれむは、いふに及ばず、親戚・近隣の交際より、家政の整理に至るまで、みづから、これをつとめ、常に、一家をして、富み榮えしめんことを心がくべし。

又、妻たるものは、常に、貞操を守りて、たとひ、其の夫、山河隔りたる遠き国に居れりとも、又、不幸にして、この世になき人となりたりとも、心をしめくりて、かりそめにも、そのみさををけがすことあるべからず。

もし、これらのことを守らぬときは、父母の教、あしき故なりと、人に思はれ、夫のしつけ、行き届かぬ故なりと、人にいはれ、ひとり、我が身の恥となるのみならず父母・夫の名をも汚すに至るべし。

されば、女子の守るべき、種々の徳行の中、貞操を以て、最、重要なものとす。其の身、如何ばかり、裁ち縫ひの業に長じ、また、他の学芸に達せりとも、この徳を欠くときは、少しも、称するに足らざるなり。

妻は、其の夫を天とす。

時代を更にさかのぼっていえば、貝原益軒の作ともいわれている江戸時代の女子の教訓書『女大学』には、次のような一章がある。

婦人は夫の家を我家とする故に唐土には嫁を帰るといふなり。假令夫の家貧賤成其夫を怨むべからず。夫より我に与へ給へる家の貧は我仕合のあしき故なりと思ひ、一度嫁しては其家を出ざるを女の道とする事、古聖人の訓也。若し女の道に背き、去らるる時は一生の恥也。されば婦人に七去とて、あしき事七ツ有り。一には嬖に順ざる女は去べし。二には子なき女は去べし。是妻を娶るは子孫相続の為なれば也。然れども婦人の心正しく行儀能して妬心なくば、去ずとも同姓の子を養ふべし。或は妾に子あらば妻に子なくとも去に及ばず。三には淫乱なれば去る。四には格気深ければ去る。五に癩病などの悪き疾あれば去る。六に多言にて愼なく物いひ過すは、親類とも中悪く成り家乱るる物なれば去べし。七には物を盗心有るを去る。此七去は皆聖人の教也。女は一度嫁して其家を出されては假令再二度富貴なる夫に嫁すとも、女の道に違て大なる辱なり。(下線は渡辺。)

明治31年に施行されたいわゆる「明治民法」が裁判上の離婚の条件として、次の条項をもうけた。これは『女大学』のもつこのような性道徳観をそのまま成文化化したものと言ってよいだろう。(注)

第813条

夫婦ノ一方ハ左ノ場合ニ限り離婚ノ訴ヲ提起スルコトヲ得。(中略)

二、妻カ姦通ヲ為シタルトキ

三、夫カ姦淫罪ニ因リテ刑ニ処セラレタルトキ(下略)

(注) 「明治民法」の下では、夫は、妻が自分以外の男性と通じたということだけで、一方的に裁判所に離婚の訴をすることができた。しかし、妻は、夫が自分以外の女性と通じたということだけでは離婚の訴をすることができなかった。自分以外の女性は女性でも、他人の妻である女性と通じたとき、しかもその女性の夫の告訴によって、自分の夫が姦通罪に問われたときに限って、妻は離婚の訴をすることができる、とされたのである。

昭和22年に削除された刑法183条は姦通罪を規定したものであるが、その第1項には、次のようにある。

有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ処ス ソノ相姦シタル者マタ同シ

わが国の刑法は、このように姦通罪は妻の不貞行為およびその相姦者の不貞行為に限って認め、夫の不貞行為には認めなかった。しかもこの姦通罪は、本夫の告訴を待ってこれを論ずる、ただし本夫が姦通をそそのかした（例えば、美人局をさせた）ときには告訴の効力がない、とされている（同条第2項）。また、告訴をなすについては、婚姻を解消したか、または離婚の訴を提起したか、何れかの手続きを履んだ上でなければならぬし、再び婚姻をなし、または離婚の訴を取り下げたときは、告訴を取消したものとみなす、とされている（旧刑事訴訟法第264条）。こんな事情によって、同じ不貞でも、妻の不貞と夫の不貞の間には、法の扱いがたの上で、大きな不平等があったのである。

4. 性向語彙の構造と性向についての価値観の構造と

人間の態度や振舞、または性格を評価記述するのに使う語、または、そのように評価記述される態度を示したり振舞ったりする人間、ないしはそのように評価記述される性格をもっている人間を指し示すのに使う語の総体をここで性向語彙と呼ぶことにする。そうすると、わたしが前述のアンケートに使用した、もっぱらセックスの観点からみた人間の態度・振舞・性格を評価記述するのに使う一連の形容詞・形容動詞は、それ自体は一つのまとまりをなして、狭いながらも、ともかくこの性向語彙の一分野をしめることになる。

いま仮にこれをセックスに関する形容詞性向語彙と呼ぶことにしよう。この性向語彙の構造とその用法の構造について簡単なものではあるが、アンケートを試みた。その結果、わたしたちは次のことを知ることができた。

1. プラスの評価よりもマイナスの評価をもって使われることが多い語のほうはるかに多い。
2. プラスの評価をもって使われることが多い語(貞淑な・貞節なの2語)は、男性よりも女性について使用するのだ、と意識する傾向が非常に強い。単語の用法の構造、別のことばでいえば、単語の意味の構造がいちじるしく女性の側に傾斜しているのである。
3. しかし、男性と女性の間には、単語の使用をめぐるかなりはっきりした意識のくいちがいがある。
4. 同じように、若い学生層と年輩の研究者層の間にも、かなりはっきりした意識のくいちがいがある。

さて以上にあげた四つの特色のうち、まず第1の特色についてであるが、プラスの評価よりもマイナスの評価をもって使われることが多い語のほうは量的にはるかに多いのは、なぜか。わたしは、それは日本の社会が伝統的にその構成員の性的な性向がマイナスの方向に逸脱することに、より強い監視の目を向けてきたからだ、と考える。

社会や集団がその存続と発展をはかっていくためには、構成員をこの目的を達成するのに最も適合した人間に仕立てあげていかなければならない。社会や

集団の目的に違背する異質分子の発生と跋扈は極力押さえていかなければならない。そのためには、まず社会や集団はみずからが求めている理想の人間像を構成員の前に示す必要がある。

例をあげよう。昭和38年6月、時の文部大臣は中央教育審議会に「すべての青少年を対象として後期中等教育の拡充整備を図るにあたっては、その理念を明らかにする必要がある、そのためには今後の国家社会における人間像はいかにあるべきかという課題を検討する必要がある。」ということで、その事についての諮問を行なった。これを受けて中教審は、3年後の昭和41年10月「期待される人間像」を答申した。これなどは、戦後の六三制教育の改革を目指す政府が中教審の名において国民に示した理想の日本人像であるといえるだろう。

明治23年10月に発布された教育勅語は、明治から太平洋戦争終結までの日本の天皇制国家が期待した理想の国民像を示したものであり、明治15年に出された軍人勅諭は、旧帝国陸海軍が期待した理想の軍人像を示したものであった。もっと溯っていえば、たとえば江戸幕府が慶安2年2月に公布した、あの有名な「慶安の御触書」は、幕藩社会の体制支配層が期待した理想の農民像を農民に提示したものであったし、同じように「女大学」は、幕藩社会が期待した理想の女性像を女性の前に示したものであった。

このように、社会や集団は、たといそれがどんなものであれ、組織としてのまとまりと発展をはかっていくために、その構成員に対して、この集団目的を達成するのに最も適合した人間であることを期待する人間像観、つまり中教審のいういわゆる「期待される人間像」をなんらかの形で提示する。そして、社会や集団は、構成員がこの「期待される人間像」からマイナスの方向に逸脱することに最も敏感な反応を示すのである。

このことは、人間の性的な性向の場合にもそっくりそのままあてはまる。そして、これがセックスに関する形容詞性向語彙についてあげた第1の特色となって現われているのだ。わたしは、このように考える。

藤原与一氏は、自分の郷里である伊予大三島の方言の性向語彙を記述したあとで、この性向語彙の構造について次のように述べている。

この「性向」語彙総体を、完結したまとまりと受けとって、一つの判断をください

てみる。人倫関係の「性向」語彙が、ひとえにと言ってもよいくらいに、あしぎまの方向、ほめるよりは非難する方向へ発展しているのが重要視される。たとえ、よい人、よいことをほめても、すっきりと、完全善意でほめるものはすくなく、ほめたことばにも、多少の批評意識がこめられがちである。このような傾向には、多分に、方言社会の社会道徳上の通念のうごき・支配が認知される。方言社会の道徳は、よいことにはあまりかまわないで、わるいことにはとかくきびしい。

こういう傾向は、おそらく、私の郷里方言だけのことではあるまい。いまかりに、このような傾向が、日本語方言共時態に普遍だとするか。そうだとした時は、語彙発展の下向性とでも言うべきものが、一つのだいじな特性として指摘されることになる。(藤原与一『方言学』三省堂 昭和37年)

「方言社会の道徳がよいことにはあまりかまわないで、わるいことにはとかくきびしい」のは、方言社会が社会としての統一性を維持し、その発展をはかっていく上で必然的に必要な措置である。そして、藤原氏のいう「性向語彙発展の下向性」もおそらくひとり大三島の方言だけでなく、日本語全体に通ずる必然的な言語現象なのであろう。

次に、プラスの評価をもって使われることが多い語(貞節な・貞淑なの2語)は、男性よりも女性について使用するのだと意識されている場合が非常に多い、という第2の特色。これは、ヘボンの和英辞書や国語辞書がこの二つの語に加えた意味用法の記述と相まって、とりもなおさず、女性と男性の性的性向についてわたしたち日本人が伝統的にもっている価値観をそのまま反映しているのだ、とわたしは考える。儒教的な、男性本位の性道徳観がそのままセックスに関する形容詞性向語彙の構造に反映していると考えるのである。

第3に、セックスに関する形容詞性向語彙の使用について男性と女性の意識の間に構造的にかなりはっきりしたくいちがいがあるという特色は、男性および女性の性的性向についての価値観が、少なくとも今回のわたしのアンケートの対象となった男性と女性の間では分裂している、ないしは断絶していることを反映しているのだ、と解釈することができるだろう。性についての価値観のギャップがそのまま性向語彙の使用意識のギャップとなって現われているのだ。

最後に、若い学生層と年輩の研究者層の間に、いくつかの形容詞語彙の使用意識をめぐるかなりはっきりしたくいちがいがある、という第4の特色もやはり男性と女性の性的性向についての価値観が二つの世代の間で分裂している、

ないしは断絶していることの反映としてみるることができる。ことばの歴史的な変化は、このような世代的な変化の積み重ねの上に成立するものなのである。

つまり「言語は、現実の反映である。」という言語と現実の関係についての最も根本的な命題は、人間の性的な性向について社会が伝統的にもってきた価値観という「現実」と、性的形容詞性向語彙という「言語」との関係の場合にもそのまま適用することができるのである。社会が、社会としての統一と発展をはかっていくために、その構成メンバーの性向について伝統的にどのような価値観、つまり「期待される人間像」を提示してきたか。そしてそれがその社会の言語の性向語彙やその用法の構造にどのように反映されてきたかについての言語社会学的な研究は、この「言語は、現実の反映である。」という命題の上にはじめて展開することができるのだ。わたしは、こう考えている。

5 第二回目の調査の実施とその集計結果

1 回目のアンケート調査の調査結果は、以上に述べたとおりである。この調査結果を確認することを主たる目的として、わたしは、引きつづいて2 回目のアンケート調査を実施した。その手続きと集計結果を以下に報告する。

5.1 調査票

アンケート調査票は、次のように改めた。

「アノ女ワ ナカナカノ 美人ダ。」とは言えますが、「アノ男ワ ナカナカノ 美人ダ。」と言ったら、間違いになります。「美人」は、女性にきまっているからです。これと反対に、「アノ男ワ ナカナカ ハンサムダ。」とは言えますが、「アノ女ワ ナカナカ ハンサムダ。」と言ったら、間違いになります。「ハンサム」と言えば、男性にきまっているからです。このように、ことばの中には、ふつう女性にしか使えないものや男性にしか使えないものがあります。

さて、次にいくつかのことばをあげました。人間の、性（セックス）に対する態度や振舞（または、そのような観点から眺めた人間の性格）を評価する際に使うことばが大部分です。これらのことばについて、次のことをやってみてください。

(1) 「美人」のように、男性に使ったら、それは間違いだ、それは女性にしか使えないことばだ、と思うものがありましたら、その記入欄には男×と記入して下さい。

(2) 「ハンサム」のように、女性に使ったら、それは間違いだ、それは男性にしか使えないことばだ、と思うものがありましたら、その記入欄には女×と記入して下さい。

(3) 「美人」のように男性に使ったら間違いだ、というわけではないが、それでも男性に使ったら、少しおかしい、ということばがありましたら、その記入欄には男？と記入して下さい。

(4) 「ハンサム」のように女性に使ったら間違いだ、というわけではないが、それでも女性に使ったら、少しおかしい、というのがありましたら、その記入欄には女?と記入して下さい。

(5) 男性に使ってもおかしくないし、女性に使ってもおかしくない、ということばには、その記入欄に男女○と記入して下さい。

(6) 以上のどれとも判定がむづかしいのは、そのままにしておいて下さい。

	ことば	記入欄		ことば	記入欄		ことば	記入欄
1	おてんばな		10	卑猥な		19	不品行な	
2	わんぱくな		11	わいせつな		20	不身持な	
3	不貞な		12	淫猥な		21	すけべえな	
4	はすっぱな		13	淫乱な		22	エッチな	
5	貞淑な		14	淫蕩な		23	尻軽な	
6	貞節な		15	淫奔な		24	あられもない	
7	いかがわしい		16	好色な		25	なまめかしい	
8	ふしだらな		17	みだらな		26	いろっばい	
9	浮気な		18	不倫な		27	しとやかな	

1回目のアンケートでは、世間では普通一般に女性（・男性）にしか使わないと思う語があったら、その語を空欄に記入してもらった。今回はこれをやめて、代わりに男×・女×・男?・女?・男女○の記号をつけてもらう方法をとった。回答者の意識をより細かく、よりはっきりとした形で知ろうとしたためである。

調査語は27語で、前回よりも8語多い。前回の調査票の19語の中から、「けがらわしい」の1語を削除し、新たに①おてんばな・②わんぱくな・⑨浮気な・⑩不倫な・⑬尻軽な・⑭あられもない・⑮なまめかしい・⑯いろっばい・⑰しとやかなの9語を追加した。このうち初めの①おてんばな・②わんぱくなの2語と、終わりの⑭あられもない・⑮なまめかしい・⑯いろっばい・⑰しとやか

なの4語は、わたしのいうセックスに関する形容詞性向語彙の枠からはみ出ている。しかし、男性・女性の態度や振舞一般には関係している語である。そこで、後続の調査語にできるだけ抵抗感のない形で答えてもらうために、いわば調査に対する導入の意味で「おてんばな」と「わんぱくな」の2語を最初に置いた。また、「しとやかな・いろっぼい」などの4語は、世代の違いによることばの使用意識のズレを調査する目的で、調査語の終わりに加えた。

5.2 調査対象と調査年月

昭和45年1月から2月にかけて、①日本大学文理学部で松尾拾教授(国語学)、②東京外国語大学で鈴木幸寿教授(社会学)、③東京都立大学人文学部で大島一郎助教授(国語学)、④共立女子大学文芸学部で蜂谷清人助教授(国語学)の講義をそれぞれ聴講している学生に講義の時間を借りてアンケートをお願いした。総数429名。大学別・男女別内訳は、第3表のとおり。平均年齢は、男子学生が20.5歳、女子学生が20.3歳。これを青年層とする。

第3表 青年層の内訳と平均年齢

	男	女	計
日本大学	80人	77人	157人
東京外大	117	56	173
都立大学	26	5	31
共立女子大	—	68	68
計	223	206	429
平均年齢	20.5歳	20.3歳	20.4歳

次に、昭和45年5月家庭の主婦および一般社会人あわせて約二百名のかたに調査票を郵送して、アンケートをお願いした。同年6月22日現在うち159名のかたから回答をちょうだいすることができた。これを中・老年層とする。この中

第4表 中・老年層の内訳と平均年齢

	男	女	計
昭和	28人	32人	60人
大正	35	40	75
明治	11	13	24
研究者	25 (47.9歳)	7 (41.9歳)	32 (46.6歳)
非研究者	49 (49.9歳)	78 (48.2歳)	127 (48.9歳)
計	74 (49.3歳)	85 (47.7歳)	159 (48.4歳)

備考：()内数字はそれぞれの群の平均年齢。

には、国語学・国語教育学の専門研究者が32名含まれている。159名の明治・大正・昭和の世代別、それに男女別などの内訳は、第4表のとおりである。平均年齢は男49.3歳、女47.7歳。昭和の世代は、昭和4～5年ごろまでに生まれたものが大部分である。したがって、これから報告する青年層と中・老年層の比較は、大学生である20歳前後の若い世代と、その父母や祖父母の世代との比較に通ずるものと考えて、それほど誤りはないだろう。

回答をお寄せくださった一般社会人の方がたは、次のとおりである。○印は、そのかたの夫人または御主人からも回答をいただいていることを示す。また、(姉)(母)は、そのかたの令姉・母堂からも回答をいただいていることを示す。(五十音順、敬称略)

愛沢成子	声沢 節(姉)	○渥美治雄	○新井輝衛
○石田作重	磯田敏子	○磯辺二葉	○氏家 武
○宇野義方	江川三郎	○遠藤 昇	遠藤孫左衛門
○大石初太郎	○大久保忠利	○大橋昭二	大橋富貴子
大村 浜	岡本まち	○小川武二	○小川 徹
○奥山益郎(母)	○尾崎源之助	○金沢 実	亀井一綱
○川田藤太郎	川又貞子	○神鳥武彦	○菅野 宏
○桐原徳重	○久保田寿美子	久保田富美子	見坊豪紀
○小林栄治	○佐藤 滋	○渋谷正則	寿岳章子
○進藤咲子	○新明正道	鈴木篁二	○鈴木孝夫
○鈴木 亨	鈴木ヒサエ	○鈴木元彦	○高橋太郎
武田記世子	○田崎宗寿	田中瑞穂	○田野崎昭夫
○田村森造	○丹治 享	土屋愛子	都竹通年雄
長沢きち	○中島繁喜	○永野 賢	中村 恵
○中村佐仲	中村静尾	○南保基武	○西尾寅弥
○二谷穎男	○同右の友人2	○根岸達躬	○根本今朝男
根本定造	根本三郎	○野村卯太郎	○野村八重
○羽生 功	○林 大	○林 四郎	○林田 明
○春原昭彦	板東 武	○飛田多喜雄	○平野 明

- | | | | |
|-------|-------|--------|-------|
| ○福田 昇 | ○舟山 浩 | ○牧野菊松 | 松田コウ |
| ○松本 昭 | ○的場益雄 | ○三樹精吉 | ○水谷静夫 |
| 南 不二男 | ○宮沢武司 | ○宮地進吾 | ○宮地 裕 |
| 武藤ます | ○宗像忠憲 | ○村石昭三 | ○山口 光 |
| ○山田 巖 | ○山本音吉 | ○横溝藤一郎 | ○吉沢典男 |
| ○吉野昭典 | ○吉野 晃 | | |

なお上記の中には、回答が6月22日以後に届いたため、集計に間に合わなかったものも若干含まれていることをお断りしておく。

また、一般社会人の一人としてアンケートをお願いした大橋富貴子氏（お茶の水女子大学附属小学校教諭）からは同氏の御回答のほかに、同氏の講義を聴講しているお茶の水女子大学生53名の回答までもいただくことができた。同氏が学生に読み聞かせ方式で(注)一問ずつ問題を与えて回答させたものである。

（注） 内訳は、4年生・3年生が各21名、2年生が11名。

5.3 調査結果

5.3.1 「不貞な」「貞淑な」「貞節な」の3語について

(a) 3語をセットで集計した場合

「不貞」「貞淑」「貞節」の3語の意味は、女性（・妻）の性的性向にかかわるものであって、男性（・夫）の性的性向にかかわるものではない。第2節でみたとおり、ヘボンの和英辞書や明治以後の国語辞書は、おしなべてこのように記述してきた。これが、男女の性について日本人が伝統的にもちつけてきた価値観であった。

第5表 3語をセットでみた場合

	青年層		中・老年層			
			非研究者		研究者	
	男 (223人) (20.5歳)	女 (206人) (20.3歳)	男 (49人) (49.9歳)	女 (78人) (48.2歳)	男 (25人) (47.9歳)	女 (7人) (41.9歳)
不貞な・貞節な・貞淑な						
A {	* 19.3%	9.2%	* 44.9%	39.7%	* 68.0%	57.1%
男×・男×・男×	0.4	* 0.5				
"・男?・男?	* 0.4					
"・男×・男?	* 8.5	3.4	* 2.0	1.3		
"・男?・男×	* 28.6	13.1	* 46.9	41.0	* 68.0	57.1
A 計						
B {	* 6.3	3.9	8.2	* 12.8	* 16.0	14.3
男?・男×・男×	* 3.1	1.0				
"・男?・男?						
"・男×・男?	4.5	* 5.8	4.1	* 5.1		
"・男?・男×	* 13.9	10.7	12.3	* 17.9	* 16.0	14.3
B 計						
A + B 計	* 42.5	23.8	* 59.2	58.9	* 84.0	71.4
C {	4.5	* 7.3	12.2	* 23.1	* 4.0	
男女○・男×・男×	* 0.4				* 4.0	
"・男?・男?	* 0.4					
"・男×・男?	3.1	* 3.9	* 2.0	1.3		
"・男?・男×	8.4	* 11.2	14.2	* 24.4	* 8.0	
C 計						
A + B + C 計	50.9	35.0	73.4	83.3	92.0	71.4
男女○・男女○・男女○	0.9	2.4		1.3		

備考：これ以外の組合せの回答および無答は省略。

それでは、今回の被調査者の中で、この辞書の記述どおりに回答したものは、どれだけいたか。それを示すのが第5表である。この第5表から次のことがわかる。

(1) 辞書の記述どおりの回答、つまり「不貞な」「貞節な」「貞淑な」の3語のどれにも男×の記号をつけたものは、非常に少ない。青年男子はわずか19.3%、同女子にいたっては1割を下回って、9.2%に過ぎない。中・老年層も、非研究者は男44.9%、女39.7%と、半数以下。研究者でさえ男68.0%、女57.1%しかいなかった。研究者を含めて被調査者は、多くの辞書が示す伝統的な使いかたの規範にはおしなべてはなはだ不忠実だったということになる。

もっとも、これらの3語のどれかまたは全部に男?の記号をつけたもの(AとBの両グループ)まで含めると、中・老年の研究者は男84.0、女は71.4%まで増加し、中・老年の非研究者も男は59.2%、女は58.9%と、ようやく半数を上回るようになる。しかし、青年層は男42.5%、女23.8%と、なお依然として半数にも達しない。二つの世代の間には、男の場合も女の場合もはっきりとしたズレがある。中・老年層よりも青年層のほうが伝統的な規範により不忠実なのである。これは、1回目の調査結果と同じである。

(2) 3語のどれにも男×の記号をつけたものは、青年層でも中・老年層でも男のほうが多い。A計の欄とA+B計の欄の数値も、女より男のほうが大きい。つまり二つの世代ともどちらかという、女性よりも男性のほうが辞書の示す伝統的な使いかたの規範に忠実なのである。これも、1回目の調査結果と同じだ。

(3) 3語のどれにも男女○の記号をつけたものは、さすがに青年層でもほとんどいない。しかし、「不貞な」に男女○の記号をつけ、残りの2語に男×か男?の記号をつけたもの(Cグループ)は、青年層で10%前後、中・老年層の女で24.4%あった。「不貞な女(・妻)」という伝統的な使いかたばかりでなく、「不貞な男(・夫)」というきわめて非伝統的な使いかたも是認するという人がとりわけ中・老年層の女の間でかなり増えていることがわかる。

1回目の調査でも、「女性にしか使わない語」として、「不貞な」「貞節な」「貞淑な」の3語をともにあげているのは、下表のように研究員グループで男39.3

%, 女22.2%, 学生グループでは男10.9%, 女16.7%しかなかった。(2回目の調査に比して, ずっと少ないのは, おそらく回答記入の仕方の違いにもとづくものであろう。)

第6表 1回目の調査の場合

女性にしか 使わない語	研究員グループ		学生グループ	
	男 (28人)	女 (27人)	男 (55人)	女 (12人)
不貞な・貞節な・貞淑な	* 39.3%	22.2%	10.9%	* 16.7%
不貞な・貞淑な	* 3.6		* 14.5	
不貞な・貞節な			* 3.6	
貞節な・貞淑な	* 46.4	44.4	* 5.5	8.3
計	* 89.3	66.6	* 34.5	25.0

「不貞な・貞淑な」「不貞な・貞節な」「貞節な・貞淑な」の2語の組合せのどれかをあげたものを含めると, 研究員グループの男は89.3%にまで増加するが, 同じ研究員グループの女は66.6%にしかない。学生グループに至っては, 男34.5%, 女25.0%にしかないのである。

(b) 3語を個別にみた場合

第7表 3語を個別にみた場合

		青 年 層		中・老年層	
		男	女	男	女
不 貞 な	男×?	* 56.5%	45.6%	* 69.0%	65.9%
	女×?	* 9.0	8.7	4.1	
	男女○	26.0	* 35.4	21.6	* 27.1
	無 答	8.5	10.2	5.4	7.1
貞 節 な	男×?	* 64.2	43.2	* 90.5	88.2
	女×?	6.7	15.6	2.7	
	男女○	16.1	* 20.4	2.7	* 7.1
	無 答	13.0	20.9	4.1	4.7
貞 淑 な	男×?	83.0	* 87.4	94.6	* 96.5
	女×?	3.5	3.4	2.8	
	男女○	4.9	4.4	1.4	2.4
	無 答	8.5	4.9	1.4	1.2

第7表は、3語を個別に集計したものである。「男×?」の欄は、男×の回答と男?の回答を合わせたものであり、「女×?」の欄は、女×の回答と女?の回答を合わせたものである。青年層の男女と中・老年層の男に女×か女?の記号をつけたものが現れているが、これは、誤ってこう回答したのか。それともそれ以外の事情によるものであろうか。よくは分からない。

この第7表から、次のことがわかる。

(1) 語別にみると、「貞淑な」に男女○の記号をつけたものは非常に少ない。大部分のものは、男×か男?の記号をつけている。ところが「不貞な」と「貞節な」、とりわけ「不貞な」には男×や男?でなく、男女○の記号をつけたものがかかなり多くいる。これも、1回目の調査結果と一致する。もちろん細かな数値までは一致しない。前回に比して今回の調査の数値のほうがおしなべて高い。これは、前にも述べたとおり、回答記入の仕方の違いにもとづくものであろう。

(2) その「不貞な」を男女別にみると、男×か男?の記号をつけたものは、二つの世代ともに男のほうが多く、反対に男女○をつけたものは女のほうが多い。「貞節な」の場合もこれと同じ関係がみられる。男のほうが伝統的な規範に忠実で、女のほうが忠実でないのだ。これも1回目の調査結果と一致する。(「貞淑な」は前回の調査結果とくいちがう。)

19ページにあげた明治民法第813条の条文は、戦後家族法の大改正によって次のように改められた。

第770条 夫婦の一方は、左の場合に限り、離婚の訴を提起することができる。

1. 配偶者に不貞な行為があったとき。(下略)

つまり新しい家族法では、「不貞な」は妻の性的性向だけでなく、夫の性的性向にもかかわるものとされたのである。辞書が記述している伝統的な規範およびその規範に忠実な人たちにとっては、まさに革命的なことであった。国語辞書の編者であるある中年男性の国語学者からいただいた調査票には、次のような注記がつけられていた。

「不貞な」は、理屈としては男女○だが、感覚としては男?だ。「夫の不貞行為」というような表現には抵抗はない。しかし、日常会話のレベルで「不貞な男」とは、特殊な表現意図がない限り、言わない。「女に強姦された男」と言わないのと同じようなものだ。

また、別の国語辞書の編者である、別の中年男性の国語学者からいただいた調査票には、次のような注記がしてあった。

「不貞な」は男×。ただし「不貞を働く」なら男女○。

伝統的なことばの規範に忠実な人たちにとって、新しい家族法的な「不貞な」の用法は、そうやすやすとなじめ得ないものであることがよくわかるだろう。

ここで、大橋富貴子氏からいただいた調査資料を紹介しておきたい。大橋氏が同氏の講義を聴講しているお茶の水女子大生53名に読み聞かせ方式で一問ずつ与え、回答してもらったものを第7表に準じて整理してみた。結果は第8表のとおりである。「貞節な」と「貞淑な」は類義語ではあるが、回答がかなり違っている。「貞節な」は、むしろ「不貞な」に対する回答とかなり似ている。

第8表 お茶の水女子大生の回答

	男×?	女×?	男女○	わからない
不貞な	79.2%	3.8%	17.0%	%
貞節な	67.9	9.4	22.6	
貞淑な	94.3		5.7	

備考：数字は、総数（53人）に対する百分比。

これは第7表の場合も同じである。「貞淑な夫（・男）」とはいわないが、「貞節な夫（・男）」「不貞な夫（・男）」といつて一向へんに思わない女性はそのうちたくさん現われるようになるに違いない。伝統的な辞書の意味記述もやがて改訂される時がやってくるに違いない。

5.32 「はすっぱな」など24語について

「不貞な・貞節な・貞淑な」を除いたのこりの24語は、回答の集計結果から次の六つのグループにまとめることができる。以下、それぞれのグループごとにその集計結果を報告する。

(1)男×?の多い語	おてんばな・しとやかな・いろっぽい・なまめかしい・あられもない・はすっぱな・尻軽な
(2)男×?と男女○の多い語	ふしだらな・みだらな・不身持な・不倫な
(3)女×?の多い語	わんぱくな
(4)女×?と男女○の多い語	すけべな・エッチな・好色な・わいせつな・卑猥な
(5)男女○の多い語	浮気な・不品行な・いかがわしい
(6)その他	淫猥な・淫蕩な・淫乱な・淫奔な

(a) 男×?の多い語

「おてんばな・しとやかな・いろっぽい・なまめかしい・あられもない」の5語、それに「わんぱくな」は、26ページでも断わってあるように、わたしのいうセックスに関する形容詞性向語彙ではない。調査への導入と世代の違いによることばの使用意識のズレの調査のためにとり入れたものである。集計の結果は、「はすっぱな」「尻軽な」と合わせて、第9表に示すとおりである。ただし「わんぱくな」は、第13表(42ページ)に示す。

「おてんばな・しとやかな・なまめかしい」の3語は、共通して男×?に回答が集中し、女×?・男女○や無答は非常に少ない。つまり大部分の被調査者は、これらのことばは女性にだけ使うものと回答している。世代や性による違いはほとんどない。「いろっぽい」だけは、男女双方に使ってよいと回答しているものが若干多い。特に中・老年の男性がそうである。

ある中年男性の国語学者の調査票には、次のような注記がしてあった。

「なまめかしい」は男?。男に使うときは、女性的な男。

「いろっぽい」は男女○。男に使うときは、女性的な男。

第9表 男×?の多い語

		青年層		中・老年層				青年層		中・老年層	
		男	女	男	女			男	女	男	女
おてんばな	男×?	%	%	%	%	あ ら れ も な い	男×?	%	%	%	%
	女×?	96.4	98.6	98.6	97.6		女×?	68.2	58.3	85.1	89.4
	男女○	1.7	1.5				男女○	2.7	2.9		
	無答	0.4			1.2		無答	10.3	14.6	5.4	5.9
		1.3		1.4	1.2			18.8	24.3	9.5	4.7
しとやかな	男×?	93.3	96.6	96.0	94.1	は す っ ば な	男×?	49.4	68.5	89.2	95.3
	女×?	1.7	1.0	1.4			女×?	4.9	6.8		1.2
	男女○	2.2	0.5	2.7	2.4		男女○	13.9	8.3	4.1	1.2
	無答	2.7	1.9		3.5		無答	31.8	16.5	6.8	2.4
いろっばい	男×?	86.5	84.0	70.3	77.7	尻 軽 な	男×?	61.9	57.3	89.2	81.1
	女×?	0.8	2.0	1.4			女×?	7.1	9.2	4.1	2.4
	男女○	8.5	11.7	25.7	15.3		男女○	18.8	22.3	5.4	10.6
	無答	4.0	2.4	2.7	7.1		無答	12.1	11.1	1.4	5.9
なまめかしい	男×?	86.5	92.7	93.2	92.9						
	女×?	2.2	1.0	1.4							
	男女○	4.9	2.4	1.4	3.5						
	無答	6.3	3.9	4.1	3.5						

また、別の中年男性の国語学者の調査票には、次のようにあった。

「いろっばい」は男?。男に使うのは、芸能人(おやま)などの場合。

いずれにせよ、「おてんばな・しとやかな・いろっばい・なまめかしい」は、女性のとる態度・振舞であって、男性のとる態度・振舞ではないという固定的な価値観が世代や性の別を問わず、広く日本人に行きわたっているようである。国語辞書の意味用法の記述にも、この価値観に忠実な注記がなされて然るべきだと思う。(53ページ以下の〔記〕(1)(2)を参照のこと。)

「あられもない」は、中・老年層では男女ともに女性にだけ使うという回答が圧倒的だが、青年層ではそれが減って、男性にも使ってよいというのが増えてくる。無答も増えている。「おてんばな」など前の4語と比べて世代間のズレがかなり現われているが、それでも「あられもない」態度や振舞をするのは、やはり女性であって、男性ではないというのが日本人の標準的な価値観のよう

だ。その意味では、岩波国語辞典や例解国語辞典の記述は、この日本人の標準的な価値観に忠実なものといえる。

岩波国語辞典（初版）

あられもない〔連語〕普通にはあり得ない。特に女の態度・振舞いとして似合わしくない。△「あり」＋「る」（助動詞）＋「も」（助詞）＋「なし」因あられもなし

例解国語辞典

あられもない（形）〔「有り得べくもない」「似合わしくない」意〕女が女らしくなく、おてんばなこと。「お嬢さまの——ふるまい」

「はすっぱな・尻軽な」の2語は、中・老年層では、男女ともに回答が男×?に集中している。国語辞典の記述も、これと一致する。

はすっぱ

- ①岩波国語辞典（初版） 女の態度や行いが軽はずみで下品なこと。うわきで品行のよくないこと。またその女。
- ②明解国語辞典 〔俗〕〔女の態度が〕下品でいやしいさま。はすは。
- ③例解国語辞典 女の態度や行いが軽はずみで下品なこと。またその女。「——な〔の〕娘」「——に見える」
- ④広辞苑（初版） 「はすは」の促音化。
はすは〔蓮葉〕 ①蓮の葉。②「はすはおんな」の略。③女のおきゃんなこと。おこないの軽はずみなこと。浮気で身持のさだまらないこと。また、その者。
- ⑤大日本国語辞典 はすは (一)はすはをんな（蓮葉女）の略。（中略） (二)女の、身持あしく、かろはずみなること。浮気にて貞操なきこと。又、其人。（下略）
- ⑥大言海 はすは 〔斜端ノ意カ、或ハ云フ、蓮葉ノ義カ〕(一)はすはめ（蓮葉女）ノ略。其条ノ(一)ヲ見ヨ。(二)旅館ノ婢。（中略）(三)処女ナド性質、身持ノ落チツカヌヲ云フ語。（下略）
- ⑦和漢雅俗いろは辞典（増訂2版）
はすは 蓮葉、はちすは、＝又うはき（芸娼妓の生活を然か呼ぶ）、はす

はむすめ 蓮葉娘 おてんばむすめ, しりがるむすめ(蓮葉女を参照せよ)

はすはをんな 蓮葉女 いたづらをんな, =あそびめ

⑧日本大辞書(増訂7版)

はすは〔斜端ノ義〕, 一説, 蓮葉デ, 一葉ツヅ離レ, 又綻ビ易イ義ナドトイフ。(-)処女ナド, 行状, 性質ナド軽々シイノヲ賤シメル語。=軽佻。

(下略)

⑨ヘボン和英辞書(3版)

HASUHA ハスハ (coll.) A noisy person.

尻軽

①岩波国語辞典(初版) ①(女が)うわきなこと。②動作が活発, または軽しいこと。

②明解国語辞典 ①動作の活発なこと。②言動の軽しいこと。③女の浮気なこと。

③例解国語辞典 〔「尻重」の対〕①動作がきびきびとして気軽に物事をするさま。「――に飛びまわって世話を焼く」「――な(の)男」②女が浮気(うわき)であること。多情。〔――な(の)女〕

④広辞苑(初版) ①尻の軽いこと。立居(たちい)の敏捷なこと。②振舞の軽々しいこと。③女の淫奔なこと。

⑤大日本国語辞典 ①しりがるきこと。起居の活潑なること。②挙動の軽卒なること。③女の浮気なること。

⑥大言海 しり(尻)条, しりが軽いニ同ジ。(しりおもニ対ス)

しり (中略)尻が軽いトハ, 起居, 気重ナラズシテ, カヒガヒシ。又, 女ノ, 浮気ナルヲモ云フ。(下略)

⑦和漢雅俗いろは辞典(増訂2版) 見出語になし。

⑧日本大辞書(増訂7版) (-)起ち居ノ活潑デアルコト。――西鶴, 一代女, 「唯一二度ニテしりがるニ立ち行ク」。(-)嫖猥デアルコト。=乱レタ風俗デアルコト。

⑨ヘボン和英辞書 初版, 2版, 3版ともに見出語になし。

以上のとおり, 国語辞書の多くは, 「はすっぱ(はすは)・尻軽」の2語を性

的性向語彙としては、女性の性向にかかわるものと記述している。中・老年層の回答の大部分は、この辞書の記述と一致するが、青年層の回答は、これと一致しないものがかかり出ている。中・老年層よりも男×?が減って、男女○や女×?, それに無答がかかり増えている。世代間のズレが顕著にあらわれている語である。

大橋富貴子氏からいただいたお茶の水女子大生53名の集計結果は、第10表のとおりである。第9表の青年層女子と共通した回答であるが、「はすっぱな」「尻軽な」の男×?の回答がかかり高いことが注目される。

第10表 お茶の水女子大生の場合

	男 × ?	女 × ?	男女 ○	わからない
おてんばな	100 %	%	%	%
しとやかな	100			
いろっぽい	81.1		18.9	
なまめかしい	94.3		3.8	1.9
あられもない	88.7		9.4	1.9
はすっぱな	86.8	5.7	7.5	
尻 軽 な	77.4	7.5	15.1	

(b) 男×?と男女○の多い語

第11表に男×?と男女○の回答が多くて、女×?の回答が非常に少なかった語の集計結果を示す。これらの語は、男性・女性の双方に使う語、または女性にだけ使う語であっても、男性にだけ使う語ではない、と意識されている傾向が高いものである。これが決して偶然に支配された調査結果でないことは、大橋富貴子氏からいただいたお茶の水女子大生の回答(第12表)をみてもわかる。ここでも、女×?の回答はおしなべて非常に少ない。回答の傾向は、第11表の場合と全く同じである。

(c) 女×?の多い語および女×?と男女○の多い語

回答が女×?に集中したのは、「わんぱくな」だけだった。第13表にその集

第11表 男×?と男女○の多い語

		青 年 層		中・老年層	
		男	女	男	女
ふしだらな	男×?	*39.9	36.4	44.6	*47.1
	女×?	2.2	2.4		1.2
	男女○	52.9	*57.8	*54.1	47.1
	無 答	4.9	3.4	1.4	4.7
みだらな	男×?	42.6	*44.6	*55.4	48.3
	女×?	1.8	2.0		1.2
	男女○	42.6	*46.1	40.5	*45.9
	無 答	13.0	7.3	4.1	4.7
不身持な	男×?	35.9	*38.4	*35.2	31.8
	女×?	8.9	12.1	6.8	4.8
	男女○	32.3	*34.0	51.4	*56.5
	無 答	22.9	15.5	6.8	7.1
不倫な	男×?	*40.8	26.2	23.0	*35.3
	女×?	2.2	2.5	1.4	1.2
	男女○	41.7	*54.4	*66.2	54.1
	無 答	15.2	17.0	9.5	9.4

第12表 お茶の水女子大生の場合

	男×?	女×?	男女○	わからない
ふしだらな	64.2 %	5.7 %	30.2 %	%
みだらな	77.4	1.9	20.8	
不身持な	75.5	5.7	17.0	1.9
不倫な	37.7	1.9	60.4	

第13表 女××?の多い語・女××?と男女○の多い語

	青年層		中・老年層			青年層		中・老年層		
	男	女	男	女		男	女	男	女	
わんぱくな	0.8	1.0	1.4	%	好色な	男×? 女×? 男○ 無答	2.6	1.0	2.8	%
すけべえな	89.3	*92.7	90.5	*94.2	わいせつな	男×? 女×? 男○ 無答	22.5	*42.7	24.4	*43.6
エツチな	4.5	4.9	5.4	3.5	卑猥な	男×? 女×? 男○ 無答	*68.2	50.5	*68.9	49.4
	5.4	1.5	2.7	2.4			6.7	5.8	4.1	4.7
	1.8	1.0					5.4	1.5	1.4	2.4
	56.5	*81.1	58.1	*67.1			20.2	*46.1	29.8	*50.6
	*34.1	14.6	*37.8	27.1			*46.6	29.1	*51.4	30.6
	7.6	3.4	4.1	5.9			27.8	23.3	17.6	16.5
	3.6	2.9	5.4	1.2			2.6	2.5	1.4	2.4
	29.6	*45.6	33.8	*37.7			19.8	*29.6	33.8	*43.6
	*56.5	46.6	*56.8	55.3			*46.2	25.2	*47.3	30.6
	10.3	4.9	4.1	5.9			31.4	42.7	17.6	23.5

計結果を示す。性別にみて、女×?が両世代とも女性にほんの少し多いことのほかは、目立った違いはない。とにかく徹底した「女×?集中型」である。国語辞書の意味用法の記述にも、この「女×?集中型」に相応した注記がなされて然るべきだ。(53ページの〔記〕を参照のこと。)

「すけべえな・エッチな・好色な・わいせつな・卑猥な」⁴の5語は、女×?と男女○の回答が多く、男×?の回答が非常に少なかったものである。(ただし、「わいせつな・卑猥な」は無答も多かった。)これらの語は、男性・女性の双方に使う語、または男性だけに使う語ではあっても、女性だけに使う語ではない、と意識されている傾向が高い語である。「すけべえな」は、特にこの傾向が顕著である。前項でみた「ふしだらな・みだらな・不身持な・不倫な」と対称的な集計結果である。

大橋富貴子氏からいただいたお茶の水女子大生53名の回答(第14表)も傾向は、第13表の場合と全く同じである。

第14表 お茶の水女子大生の場合

	男×?	女×?	男女○	わからない
わんばくな	%	100 %	%	%
すけべえな		88.7	11.3	
エッチな		69.8	30.2	
好色な		43.4	54.7	1.9
わいせつな	1.9	67.9	28.3	1.9
卑猥な		73.6	24.5	1.9

つまり、女性は、もしその性的性向を批難されるとすれば、「ふしだらな・みだらな・不身持な・不倫な」ものとして批難されることが、相対的にいって、男性よりも多い。また、男性は、もしその性的性向を批難されるとすれば、「すけべえな・エッチな・好色な・わいせつな・卑猥な」ものとして批難されることが、同じように相対的にいって、女性よりも多い。こういう現実がわたしたちの周囲にあって、それが今回の調査にこのような形で反映されたのだ、とわたしは考える。

福沢諭吉の『女大学評論』（明治32年）に次のようなくだりがある。

（上略）第三姪乱なれば去ると云ふ。我日本国に於て古来今に至るまで男子と女子と孰れが姪乱なるや。其姪心の深淺厚薄は姑く擱き、姪乱の実を逞うする者は男子に多きか女子に多きか、詮索に及ばずして明白なり。男女同様姪乱なれば離縁せらるるとあれば、男子として離縁の宣告を被る者は女子に比較して大多数なる可し。然るに本書には特に女子の姪乱を以て離縁の理由とす。亦是れ方角違ひの沙汰と云ふ可きのみ。（下略）（『福沢諭吉全集』第6巻 岩波書店 p.474）

19ページに引用した『女大学』の「七去」のうち、その第3「淫乱なれば去る」を福沢が批判したくだりである。さしづめここにいう「姪乱なる」女性と男性は、同じ「姪乱」でも、それぞれ「ふしだらな（・みだらな・不身持な・不倫な）女性」、「すけべえな（・エッチな・好色な・わいせつな・卑猥な）男性」と批難されることが多い、ということになる。

そうは言っても、男性と女性の回答の間には、次のような傾向的な違いがある。すなわち、二つの世代に共通して、どの語も女×？の回答は女性のほうが多く、男女○の回答は男性のほうが多いという違いである。つまり女性は、これらの語を女性にだけ使うことには、男性以上に強い反発を示し、男性は男性で、これらの語はわれわれ男性ばかりでなく、女性にも使って一向に差支えないのだ、ということをも女性以上に強く主張している。男性と女性がたがいに張り合っているのだ。1回目の調査でも、男性と女性の回答の間にこれと同じ傾向の結果がでていることは、前述したとおりである。

ここで念のために、国語辞書が「すけべえな」「好色な」の2語（それにその関連語である「いろごのみ」を男女のいずれ（または双方）にかかわるものと記述しているかを見てみよう。手もとにあるいくつかの国語辞書と方言辞書の場合は、次のようになる。辞書によってかなりまちまちだ。（以下、下線は渡辺。）

①岩波国語辞典（初版）——特に男女のいずれとも断わってはいない。

すけべえ 〔俗〕好色なこと。好色家。漁色家。▷「すき兵衛」の転という。

好色 いろごとが好きなこと。いろごのみ。「——漢」

いろごのみ 情事をこのむこと、またそういう人。

②明解国語辞典——主に男性だけにかかわる語としているようだ。

すけべえ 〔俗〕好色な人。

好色 (女)色をこのむこと。いろごのみ。

いろごのみ 女色を好む・こと(人)。

③例解国語辞典——これは男性だけにかかわる語だという立場をとっているようだ。

すけべえ 〔好色な男の意の「すき兵衛」の転。俗語〕好色なこと・人。

またそれに関連した下品なこと。「——なことを言う」「——ったらしい人」

好色 異性との情事にふけること。いろごのみ。「——な人」「きわめて——の男」「——家(漢)」

いろごのみ 女が好きなこと・人。好色。好。

④広辞苑(第一版)——これは、男女の双方にかかわるものとしているようだ。

すけべえ (好(すき)兵衛の転という)好色の人。すきもの。助平(すけべい)。

好色 ①美しい容色。また、その女。(中略) ②女色を好むこと。

いろごのみ。③いろごのみの女。遊女など。

いろごのみ 情事を好むこと。また、その人。好色。

⑤大日本国語辞典——男女の双方にかかわるものとしているようだが、はっきりしない。

すけべえ 好色の人。浮世風呂(あんまりべたべたと化粧したのも助兵衛らしく、しつこくて見ともないよ。)

好色 ①女色を好むこと。いろごのみ。(中略) ②美しき顔色。又、其の女。(中略) ③色好みの女。遊女など。(下略)

いろごのみ 女色を好むこと。又、其の人。好色。好色家。(下略)

⑥大言海——男性だけにと立場のようだが、はっきりしない。

すけべえ 〔好^{スキ}ヲ、擬人シタル語〕色好ミナル人ヲ呼ブ称。(下略)

好色 イロゴノミ。スキ。

いろごのみ 女色 ヲ好ムコト。スキ。好色。(下略)

⑦和漢雅俗いろは辞典——男女の双方にかかわるとしているようだ。

すけべい [俗] 助倍, いろごのみ。

好色 いろごのみ。をんなずき。

いろごのみ 好色。いろずき=をんなずき, =をとこずき。

⑧日本大辞典——「すけべえ」はともかく、「好色」は男性にかかわるとしているようだ。

すけべえ 見出語になし

好色 イロゴノミ。=ヲンナズキ。

いろごのみ 婦人ヲ好ムコト。=カウショク。——「いろごのみノウマレツキ」。

⑨近世上方語辞典(前田勇著)——はっきり男女の双方にかかわると記述している。

すけべい [助平] (助兵衛とも書く。^ヲ好の人名化という) 好色家。男女双方にいう。元禄十四, 五年信田小太郎三「見れば髪を切たる若後家, すけべいらしい目元」

ついでに、上方語の用例をもう一つあげておこう。今東光作「美童」(『小説現代』昭和46年4月号所収)は、大正期の大阪府八尾中野村のある天台宗の寺を舞台にしてくりひろげられる僧侶の男色の世界をえがいた作品である。作者は、この作品に登場する人物の会話にすべて上方語を使った。そして、その中に次のような「すけべい」の用例があった。女性に使った例である。

(上略)太吉の母親というのは村人の噂では4人目だとか5人目だとかいう話で、布施辺の小料理屋の淫売仲居という身の上だ。

「そんでな。お父^{ちち}うが博奕^{ハカ}にいて何日も戻らんと、わいが風呂に入るとる時、お義母^{かみ}んが流したるちゅうて入ってきて、わいのチンポなぶりよんねや。吸うたり弄^もうたり……」

「へえ。おもしろいな」

「おもしろくないよ。ほてから股倉洗う振りして、(中略) 大分にうちのお義母^{かみ}んは助平や」

知光丸はいよいよ大人の世界の不思議さを思い知らされた。(下略)

ついでにいえば、わたしの native language である福島北部方言の場合も、「すけべえ」は、男女の双方に全く平等にかかわることばである。「すけべえ

おなご(女)」に「すけべえおとこ(男)」という言いかたは、仲間うちの日常の話しことばの世界では、ごく普通に使われている。

⑩大阪方言事典(牧村史陽編)——別に男女のいずれとは断わっていない。

スケベエ……色を好む人。いろずき。スキ〔好〕(好色の意)をスケと転じ、平または兵衛を添えて擬人化したもの。『俚言集覧』に「助兵衛、淫人を云ふ。移山按ずるに、往古のはやり言葉にて、好色をすけす[淫]といふを、すけべいと云ひしならん。人名の様に云ひなしたる流行詞多し。承知之助・浮介・十筋右衛門などといふ類なるべし」(下略)

⑪揖斐郡徳山村方言(岐阜大学教育学部郷土資料1——岐阜大学教育学部編)

——これは、下のようにはっきりと女性に限っている。

すけべい みだらな女。

⑫名古屋言葉辞典(山田秋衛著)——「すけべい」は見出し語になかったが、「ものよみすけべい」があった。これをみると、「すけべい」は男性にかかわるものらしい。

モノヨミスケベイ 読書欲の旺盛な人の称。寧ろそれを嘲笑するに使う。

女色を漁る人を助平と呼んだ。凡そ本を読むことなど、市井の渡世第一の稼ぎ人から見れば大の道楽であって、女に対する助平と同様にみていたから、こんな言葉ができたのであろう。江戸時代の詞。

⑬飛驒のことば(土田吉左衛門著)——特に男女のいずれとは断わっていない。派生的な意味用法が⑩の「ものよみすけべい」と共通して、おもしろい。

すけべー ①好色な人。②転じて物事に熱心な者。執心深い人。(踊りーが又来たわいな。踊り止めまい夜明けまで。——高山音頭——)

なお「すけべえな」「好色な」と同じ傾向の回答があった「エッチな・わいせつな・卑猥な」の3語のうち、「わいせつな・卑猥な」の2語は、上にあげてきた国語辞書では、特に男性だけにかかわる語だという記述はなされていない。(「エッチな」は、どの辞書にも収録されていない。)また、「ふしだらな・みだらな・不身持な・不倫な」の4語は、「すけべえな・好色な」などとは反対の傾向の回答があった語だが、これも、辞書では特に女性だけにかかわる語

だという記述はなされていない。「しとやかな・いろっぼい・なまめかしい・あられもない・はすっぱな・尻軽な」などが徹底した「男×?集中型」であったのに比べれば、これらは、女×?の回答のほかに男女○の回答もかなり多かったのだから、当然のことであると言える。

〔記〕

「卑猥な」について、中・老年層の2名のかたから、「卑猥な話」「卑猥な事」のようになら使うが、「卑猥な男」「卑猥な女」のように使わないのではないか、という趣旨の注記をいただいた。たしかにその通りである。しかし、「卑猥な話(・振舞・行為・態度)」のように、人間の振舞や態度には使うので、性格そのものには使わないけれども、これも性向語彙の中に入れた。「わいせつな」「淫猥な」なども、これと同じ理由で性向語彙の中に入れてある。

(d) 男女○の多い語

回答が男女○に集中したのは、「浮気な・不品行な・いかがわしい」の3語である。第15表(i)にその集計結果を示す。3語の中でも、「浮気な」は徹底した男女○集中型である。

お茶の水女子大生の回答も、第15表(ii)に示したとおり、3語ともに男女集中型。回答の傾向は、第15表(i)の青年層女子と全く同じである。

第15表(i)で、3語に共通して次のことが認められる。男×?と女×?の回答はともに少ない。しかし、性別にみると、どの語も男×?の回答は男性のほうが多く、女×?の回答は女性のほうが多い。二つの世代がともにそうである。つまり、ここでも男性と女性がたがいに張り合っているのである。

(e) その他の語

最後に、残った「淫猥な・淫蕩な・淫乱な・淫奔な」の4語の集計結果をまとめて第16表に示す。

このうち、中・老年層の「淫乱な・淫奔な」は、男×?がかなり多くて、男女○も少し多い。だが、女×?が非常に少ない。タイプとしては、第11表の「ふしだらな・みだらな・不身持な・不倫な」に似ている。しかし、青年層で

第15表（イ） 男女○の多い語

		青年層		中・老年層	
		男	女	男	女
浮気な	男 × ?	* 4.5	1.0	* 5.5	2.4
	女 × ?	2.2	* 2.9		* 5.9
	男女 ○	89.2	93.2	93.2	85.9
	無 答	4.0	2.9	1.4	5.9
不品行な	男 × ?	* 5.8	3.4	* 4.1	2.4
	女 × ?	6.7	* 10.6	6.8	* 8.2
	男女 ○	74.0	79.6	83.8	81.2
	無 答	13.5	6.3	5.4	8.2
いかがわしい	男 × ?	* 12.1	10.2	* 20.3	9.4
	女 × ?	6.3	* 7.3		* 10.6
	男女 ○	69.1	71.4	71.6	70.6
	無 答	12.6	11.2	8.1	9.4

第15表（ロ） お茶の水女子大生の場合

	男 × ?	女 × ?	男女 ○	わからない
浮気な	1.9%	7.5 %	90.6 %	%
不品行な	13.2	7.5	79.2	
いかがわしい	13.2	20.8	66.0	

は無答が多く、そこでは中・老年層がもっているパターンがかなりくずれている。そのため第11表には加えなかった。青年層に無答が多いということは、この「淫乱な・淫蕩な」の2語が青年層には余りなじみのない語であるためだろうか。

いっぽう「淫猥な・淫蕩な」は、中・老年層の場合概して女×?と男女○が多く、男×?が少ない。第13表の「すげべえな・エッチな・好色な・わいせつな・卑猥な」と回答の傾向が似ている。しかし、青年層の回答がこのパターンからかなりくずれている（第13表で最もくずれている「卑猥な」よりもくずれ

ている)ので、第13表には加えなかった。この二つの語も青年層の無答が相対的に多い。これもこの二つの語が青年層にはなじみのうすい漢語であるためか。

第16表 その他の語

		青 年 層		中・老 年 層	
		男	女	男	女
淫 猥 な	男 × ?	* 11.2	4.8	* 19.0	3.6
	女 × ?	16.2	* 25.3	21.6	* 32.9
	男 女 ○	* 35.4	14.1	* 41.9	30.6
	無 答	37.2	* 55.8	17.6	* 32.9
淫 蕩 な	男 × ?	* 10.3	3.8	* 20.3	10.6
	女 × ?	35.4	* 41.3	37.8	* 40.0
	男 女 ○	* 29.1	14.6	* 33.8	28.2
	無 答	25.1	* 40.3	8.1	* 21.2
淫 乱 な	男 × ?	* 32.3	18.0	* 62.1	41.1
	女 × ?	9.4	* 15.0	1.4	* 14.1
	男 女 ○	* 34.1	24.3	* 25.7	23.5
	無 答	24.2	* 42.7	10.8	* 21.2
淫 奔 な	男 × ?	* 16.1	9.7	* 59.5	41.2
	女 × ?	13.4	* 19.0	6.8	* 14.2
	男 女 ○	* 33.6	18.4	18.9	* 22.4
	無 答	36.8	* 52.9	14.9	* 22.4

第17表 お茶の水女子大生の場合

	男 × ?	女 × ?	男 女 ○	わからない
淫猥な	24.5%	52.8%	11.3%	11.3%
淫蕩な	11.3	69.8	5.7	13.2
淫乱な	37.7	17.0	32.1	13.2
淫奔な	15.1	41.5	17.0	26.4

この第16表の4語にも、共通して次の事実が認められる。男×?の回答は男のほうが多く、女×?の回答は女のほうが多い。二つの世代がともにそうである。つまり、ここでも男性と女性がたがいに張り合っているのである。1回目の調査で知った事実は、ここでも確かめることができた。

お茶の水女子大生の回答は、第17表に示したとおりである。第16表の青年層女子の回答に比べて、無答が非常に少ない。

5.33 まとめ

27の調査語のうち、わたしのいういわゆるセックスに関する形容詞性向語彙21語だけを回答の内容によって分類したものを、ここで第18表にまとめて示しておきたい。

第18表 性的性向語彙21語のまとめ

(a) 男×?の多かった語 (女性専用)	不貞な・貞節な・貞淑な・はすっぱな ・尻軽な (5語)
(b) 男×?と男女○の多かった語 (どちらかという、女性用)	ふしだらな・みだらな・不身持な・不 倫な (4語)
(c) 女×?の多かった語(男性専用)	なし (0語)
(d) 女×?と男女○の多かった語 (どちらかという、男性用)	すけべえな・エッチな・好色な・わい せつな・卑猥な (5語)
(e) 男女○の多かった語 (男女両性用)	浮気な・不品行な・いかがわしい (3語)
(f) その他	淫猥な・淫蕩な・淫乱な・淫奔な (4語)

(a)欄は、「女性にしか使わない(女性専用)」と意識されている傾向が非常に高い語であり、(c)欄は「男性にしか使わない(男性専用)」と意識されている傾向が非常に高い語である。(e)欄は、「男性・女性の双方に同じように使ってよしい(男女両性用)」と意識されている傾向が非常に高い語である。これに対して、(b)欄は、「男性・女性の双方に使ってよい」が、また、「男性に使わないで、女性に使う」とも意識されている傾向が強い語である。(d)欄は、「男性・女性の双方に使ってよい」が、また、「女性に使わないで男性に使う」とも意識されている傾向が強い語である。そこで、大まかに(b)欄を「どちらかという、女性用」、(d)欄を「どちらかという、男性用」と名づけることができる。

この第18表から、次のことが指摘できるだろう。

(1) (a)欄が5語で、(c)欄が0語。つまり、女性の性的性向だけを評価記述するのに使う、と意識されている傾向が強い語は五つもあるのに、男性の性的性向だけを評価記述するのに使う、と意識されている傾向が強い語は一つもなかった。これは、大橋富貴子氏からいただいたお茶の水女子大生53名の資料の場合も全く同じだった。1回目の調査結果の記述の中で、わたしは、人間の性的性向を評価・批判する際の日本人の意識構造は、バランスを欠いていて、男性よりも女性の側にきびしく傾斜しているという趣旨のことを述べたが、このことは、今回の調査でもはっきりと現われたわけである。ただし、この意識構造が、世代の違いや性の違いに対応して、かなり違っていることは、すでにそれぞれの個所で報告したとおりである。

(2) (b)欄の「どちらかという、女性用」と目される語に「ふしだらな」以下四つの語が現われ、(d)欄の「どちらかという、男性用」と目される語に「すげべえな」以下五つの語が現われた。しかし、前にも述べたことだが、これが決して偶然の支配によるものでないことは、お茶の水女子大生53名もこれと全く符合する回答をしていることからみても、確かである。

(3) 21語のうち、プラスの評価で使われることが多いのは、「貞節な・貞淑な」の二つだけで、残りはすべてマイナスの評価で使われることが多いものである。1回目の調査結果の記述の個所でも述べてるように、マイナスの評価・プラスの評価の面からみて、語彙の量的構造がひどくアンバランスなのである。(注)

(注)「品行」「身持」「作法」……などなど、名詞に「不」「無」がついて、「不品行な」「不身持な」「不作法な」……などなど、形容動詞が派生されていく事情もあるが、このことは、ここでは余り問題にならない。

〔記〕

(1) 36ページ以下と40ページ以下で報告したように、「おてんばな」は回答が男×?に集中し、「わんぱくな」は女×?に回答が集中した。つまり「おてんば」という性向の主体は女性であり、「わんぱく」という性向の主体は男性（と言っても、男性一般ではなく、男の子ども）であるという弁別の特徴をもっている。

したがって、国語辞書もこの弁別の特徴にもとづいた記述をすべきだと思うが、実情は必ずしもそうではない。多くの辞書に共通してみられるのは、「おて

んば」は女性の性向だとは明示しているが、「わんぱく」は男の子どもの性向だとは明示していない、ということである。一、二の例外を除けば、これが辞書の習慣的な記述の仕方ようだ。少なくとも現代語の辞書としては、訂正すべきことだと思う。以下に、いくつかその事例を提示する。

①岩波国語辞典（初版）

おてんば 女が、臆面（おくめん）もなく、活発に元気よく行動すること。
また、その女。おはね。

わんぱく 子供がいたずらで、言うことを聞かないさま。そういう子供。

②明解国語辞典

おてんば 女としてのたしなみを忘れてふざけさわぐ女。おきちゃん。おはね。フラッパア。

わんぱく 子どもが・わがままにふるまう。(いたずらをする) こと。わがまま・(いたずら) 子ども。

③例解国語辞典

おてんば 若い女・女の子などが元気がよくて男のようにはねまわること。
またそういう女。「うちの娘は——で困る」「——な〔の〕娘」

わんぱく 子供が言うことをきかずに暴れ、わがままにふるまうこと。またその子供。「——な〔の〕少年」「——のし放題」「——を言うな」「——小僧」「——盛りの子」

④広辞苑（初版）

おてんば 臆面もなくはしゃぎ回る女。出過ぎた女。おきちゃん。てんば。
わんぱく 子供が無理をいい、いたずらをする事。わがままでわるさをする事。また、その子供。「——小僧」

⑤大日本国語辞典

おてんば 出過ぎたる女。おとなしからぬ女。

わんぱく 小児の無理をいひ、又手に余るほどいたずらなること。我儘なること。わやくなること。又、其の小児。わっぱ。(下略)

⑥大言海

おてんば 女ノ、デスギタルモノ。タシナミナキ女。アバズレモノ。オキ

ヤン。

わんぱく 小児ニ云フ語。思慮ナキ無理ノ言ヒ事。ワルサヲナスコト。ヤンチャ。又、ソノ児。ワガママナル子。(下略)

⑦和漢雅俗いろは辞典

おてんば 不羞，不謹慎，ですぎたる (女にいふ)，うちきならぬ，おはね。
わんぱく 頑悪，かたくな，あばれ (小児にいふ)

⑧へボン和英辞書 (3版)

O TEMBA オテンバ adj. (coll.) Forward, bold, impudent, — only spoken of females : — musume, a bold, forward girl.

WAMBAKU ワンバク n. Self-willed, obstinate, — said of children : — mono; — na kodomo, Syn. WAGAMAMA.

(2) 36 ページ以下で報告したように、「しとやかな・なまめかしい」も回答が男×?に集中した。「いろっぼい」も、回答がかなりの程度男×?に集中した。

「おてんばな・はすっぱな・尻軽な・あられもない・貞淑な・貞節な・不貞な」などなどが程度の違いこそあれ、回答が男×?に集中したこと。これに対応して、現代語辞書も多くは、この男×?という弁別の特徴に言及した記述をしていること。これらは、すでに報告したとおりである。

したがって、「しとやかな・なまめかしい・いろっぼい」の語の意味の記述の場合も、これらの単語が程度の違いこそあれ、男×?の弁別の特徴をもっているということに言及しておくべきだと思う。男×?であるか、女×?であるか、それとも男女○であるかということは、性向語彙の意味用法の記述の上でゆるがせにできない大事なことだ、と考えるからである。外国人に対する日本語教育などの場合、このことは、とりわけ重要な意味をもってくるだろう。

ところが、実際をみると、必ずしもそうではない。辞書によってかなりまちまちのようだ。前述した「わんぱく」の場合と同じく、改めてよいことだと思う。

(3) 「夫婦は一心同体」という。ことばの使用意識の場合はどうだろうか。夫婦の間でどの程度一致し、どの程度くいちがっているか。

昭和45年6月17日までに、61組の御夫婦から回答をいただいた。そこでこの

61組の夫婦の回答は、それぞれ夫婦間でどの程度一致しているか。

	(a) 男×?の多かった語					(b) 男×?と男女○の多かった語				(d) 女×?と男女○の多かった語				
	不貞な	貞節な	貞淑な	はすばな	尻軽な	ふしだらな	みだらな	不身持な	不倫な	すげえな	エッチな	好色な	わいせつな	卑猥な
(A) 回答が一致	46.9	81.3	90.7	87.5	74.9	29.8	34.3	20.3	12.6	39.0	17.2	20.3	23.6	20.4
{ 夫婦とも男×? " 女×? " 男女○	9.4	1.6			1.6	32.8	21.9	31.3	45.3	15.6	34.4	37.5	23.4	23.4
小計	56.3	82.9	90.7	87.5	76.5	62.6	56.2	51.6	57.9	54.6	51.6	57.8	47.0	43.8
(B) 回答がくいちがいがい	31.4	9.5	7.9	6.3	18.9	31.4	39.1	36.0	31.3	34.4	37.6	31.4	25.1	25.1
(C) 双方または片方が無答	12.3	7.6	1.4	6.2	4.6	6.2	4.7	12.5	10.9	10.9	10.9	10.9	28.0	31.2
(A) — (B)	24.9	73.4	82.8	81.2	57.6	31.2	17.1	15.6	26.6	20.2	14.0	26.4	21.9	18.7

(続き)

	(e)男女〇の多かった語			(f)その他									
	浮気な	不品行な	いかかわしい	淫猥な	淫蕩な	淫乱な	淫奔な	わんぱくな	おてんばな	しとやかな	なまめかしい	あられもない	いろいろい
(A) 回答が一致	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
(A) 夫婦とも男女?			4.8	3.2	1.6	40.7	31.2		96.9	90.7	87.5	73.5	64.1
(A) " 女×?		3.2		7.8	14.1	1.6		92.3					
(A) " 男女〇?	82.8	73.4	51.6	21.9	23.4	7.8	7.8	1.6				3.1	9.4
(A) 小計	82.8	76.6	56.4	32.9	39.1	50.1	39.0	93.9	96.9	90.7	87.5	76.6	73.5
(B) 回答がくいちがい	9.5	14.0	26.7	25.0	45.3	25.1	29.8	6.2	1.6	4.7	4.8	6.3	18.7
(C) 双方または片方が無答	7.8	9.4	17.0	42.2	15.6	24.9	31.3		1.6	4.7	7.8	17.2	7.8
(A) - (B)	73.3	62.6	29.7	7.9	-6.2	25.0	9.2	87.7	95.3	86.0	82.7	70.3	54.8

61組に限って、参考までに上記のことを調べてみた。結果は、前ページと前々ページの表に示したとおりである。

表中各欄の数字は、61組全体に対する百分比。(A)欄で、「夫婦とも男×？」というのは、次の四つの組合せを一括したものである。「夫婦とも女×？」と

- (a) 夫婦とも男×と回答したもの
- (b) " 男? "
- (c) 夫は男×, 妻は男? と回答したもの
- (d) " 男?, " 男× "

いうのも、これに準ずる。(B)欄の「回答がくいちがい」には、次の六つの組合せが一括されている。

- (a) 夫は男×?, 妻は女×? と回答したもの
- (b) " " , " 男女○
- (c) 夫は男女○, 妻は男×? と回答したもの
- (d) " " , " 女×? "
- (e) " 女×?, " 男×? "
- (f) " " , " 男女○ "

この表から、たとえば次のことなどがわかる。

(1) 「貞淑な・貞節な・はすっぱな・尻軽な」は、総じて夫婦間の一致の度合が高いが、「不貞な」は、それに比べるとかなり低い。この語は、やはり夫婦の間でもかなり意見がくいちがうものであるようだ。

(2) 「わんぱくな・おてんばな・しとやかな・なまめかしい」も、総じて一致の度合が非常に高い。それに比べると、「いろっぼい・あられもない」は、若干低い。

(3) 総じて、(f)その他、(d)女×? と男女○の多かった語、(b)男×? と男女○の多かった語などの欄の語は、一致の度合が低い。

II 言語活動に関する形容詞的性向語彙の場合

1. 調査票と調査の実施

セックスに関する形容詞性向語彙の2回目のアンケート調査を実施した際、それと抱きあわせに言語活動に関する性向語彙のアンケート調査も試みた。人間の性格や態度を言語活動の観点から評価記述する際に使う語を21語提示し、その使用意識をたずねようとしたものである。21語の内訳は、下記のとおりである。

A、口数が多い・少ないの観点からみた性向語彙——9語

(イ) 口数が多いことを意味するもの

口ガ軽イ・オシャベリナ・饒舌ナ・多弁ナ・ロマメナ

(ロ) 口数が少ないことを意味するもの

口ガ重イ・無口ナ・寡黙ナ・ダンマリ

B、話し・聞くがじょうず・へたの観点からみた性向語彙——11語

(イ) じょうずを意味するもの

話シジ ヨーズナ・聞キジ ヨーズナ・能弁ナ・雄弁ナ・口ガ達者ナ・ロジ ヨーズナ・口巧者ナ・口八丁ノ

(ロ) へたを意味するもの

話シベタナ・ロベタナ・トツ弁ナ

C、その他——1語

話シ好キナ

以上のうち、「口ガ軽イ・口ガ重イ・口ガ達者ナ」はもちろん単語ではない。それらに対応する単語は「口軽な・口重な・口達者な」である。しかし、日常ふつうの話しことばとしてよく使われるのは、後者よりもむしろ前者のほうではないかと思い、前者のほうを調査語に加えた。セックスに関する形容詞性向語彙のアンケートの方では、このような連語は一つも調査語に加えなかった。「言語活動に関する形容詞的性向語彙」と、形容詞に「的」をそえたのはこのためである。

「ロガ軽い」と「ロガ重い」をセットにして調査語にとりあげたが、これに「ロガ堅い」も加えるべきだったと反省している。「ロジョーズナ・口巧者ナ・ロガ達者ナ」などのほかに、「ロがうまい」も加えるべきだったと思う。

ともかく、口数が多い・少ないという言語活動の観点。それに話し・聞くという言語活動がじょうずかへたかという観点。この二つの観点から人間の性格を評価記述する際に日常よく使われるであろう形容詞的性向語彙を上記A・B 2群の計20語で一応代表させることにする。

これに「話シ好キナ」の一語を加えた計21語をひとつひとつ「アノ人ワ — ナ 人ダ」 「アノ人ワ — イ 人ダ」, または「アノ人ワ — ダ」という文型にはめこみ、次のような文言と問題配列の順序でアンケート協力者に提示した。第2問から第21問までの各問の選択肢は、すべて第一問の選択肢と全く同じなので、ここでは省略する。終わりの第22問と第23問は、言語活動の観点からみたアンケート協力者の性格がこれらの性向語彙の使用意識とどのようにかかわっているかをみようととして、用意したものである。

国立国語研究所第2資料研究室からの

おねがい

ことばの使いかたについて、どのような意識をお持ちになっているか、お聞かせ下さい。わたくしどもの研究室の貴重な研究資料にさせていただきますたく存じます。

-
- 男・女 (あてはまるほうを○で囲む。)
- 年齢 _____ 歳

1. ある人の性格について、「アノ人ワ オシャベリナ 人ダ」と言った場合、この「オシャベリナ 人ダ」ということばの中には、どちらかというところ、そのような性格を非難する気持、あるいは、けなす気持など、いわばマイナスの評価めいた気持が働いていることのほうが多いでしょうか。それとも、どちらかというところ、そのような性格をほめる気持、あるいは立派だと思ふ気持や望ましいと思ふ気持など、いわばプラスの評価めいた気持

が働いていることのほうが多いでしょうか。それとも、このようなマイナスやプラスの評価めいた気持とは関係のない場合のほうが多いでしょうか。次の選択肢のうち、適当と思うものを一つだけ○で囲んで下さい。

(以下、同じです。)

ア. どちらかという、マイナスの評価めいた気持が働いていることのほうが多い。

イ. どちらかという、プラスの評価めいた気持が働いていることのほうが多い。

ウ. マイナスの評価めいた気持が働く場合と、プラスの評価めいた気持が働く場合とが同じくらい。

エ. プラス・マイナスの評価めいた気持とは関係のない場合のほうが多い。

オ. なんともいえない。

2. 「アノ人ワ 口ジョーズナ 人ダ。」と言った場合は、どうですか。

3. 「アノ人ワ 話シジョーズナ 人ダ。」と言った場合は、どうですか。

4. 「口 聞キジョーズナ 人ダ。」 " "

5. 「口 口八丁ノ 人ダ。」 " "

6. 「口 無口ナ 人ダ。」 " "

7. 「口 話シベタナ 人ダ。」 " "

8. 「口 口ベタナ 人ダ。」 " "

9. 「口 口ガ 軽イ 人ダ。」 " "

10. 「口 口ガ 重イ 人ダ。」 " "

11. 「口 口ガ 達者ナ 人ダ。」 " "

12. 「口 雄弁ナ 人ダ。」 " "

13. 「口 トツ弁ナ 人ダ。」 " "

14. 「口 寡黙ナ 人ダ。」 " "

15. 「口 口マメナ 人ダ。」 " "

16. 「口 能弁ナ 人ダ。」 " "

17. 「口 口巧者ナ 人ダ。」 " "

18. 「アノ人ワ 多弁ナ 人ダ。」と言った場合は、どうですか。
19. 「 〃 饒舌ナ 人ダ。」 〃 〃
20. 「 〃 ダンマリダ。」 〃 〃
21. 「 〃 話シ好キナ 人ダ。」 〃 〃
22. あなたは、ごく一般的にいて、口数の多いタイプの人と口数の少ないタイプの人とは、どちらのほうが好きですか。どちらもきらいだということでしたら、どちらがよりきらいでないですか。次のうち、あてはまるものを一つ選んで、○で囲んで下さい。
- ア. どちらかというと、口数の多いタイプのほうが好きだ。
- イ. どちらかというと、口数の少ないタイプのほうが好きだ。
- ウ. どちらかというと、口数の多いタイプの人のほうがよりきらいでない。
- エ. どちらかというと、口数の少ないタイプの人のほうがよりきらいでない。
- オ. どちらともいえない。
- カ. わからない。
23. 次に、あなた自身の性格について伺わせて下さい。あなたは、自分の性格が口数の多いタイプだと思っていますか。それとも、口数の少ないタイプだと思っていますか。次のうち、あてはまるものを一つだけ選んで、○で囲んで下さい。
- ア. 口数が多いタイプだと思う。
- イ. どちらかというと、まあ口数の多いタイプのほうだと思う。
- ウ. どちらともいえない。
- エ. どちらかというと、まあ口数の少ないタイプのほうだと思う。
- オ. 口数の少ないタイプだと思う。

セックスに関する形容詞性向語彙のアンケート調査と抱きあわせでやったので、調査の実施年月日と回答者は、それと全く同じである。セックスに関する形容詞性向語彙のアンケートが27問あるから、回答者は、上の23問と合わせて、計50問に回答する作業を引受けたことになる。

2. 調査の結果

青年層429名と中・老年層159名の回答の集計結果を第19表(イ)(ロ)(ハ), 第20表(イ)(ロ)(ハ), 第21表・第22表・第23表(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)に示す。(ただし, 第22問と第23問の集計結果は, 86ページ以下に報告してある。) 第23表を除く各表の選択肢欄にある一・十・一十・0・?の記号は, それぞれアンケートの(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ)の選択肢のことである。また, 表中各欄の数字は, それぞれ青年層429名, 中・老年層159名のうち当該選択肢を回答した者がしめる百分比である。第22表で, 20語の平均というのは第19表(イ)(ロ)の9語と第20表(イ)(ロ)の11語を合わせた20語の平均のことであり, 21語の平均とは, それにさらに第21表の1語(話シ好キナ)を加えた21語の平均のことである。第23表(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)は, 21の調査語を一・十・一十・0・?の選択肢別に, 支持率の高い順に配列したものだ。なお第19表(イ)(ロ)・第20表(イ)(ロ)の青年層の欄で, カッコ内の数字は, 大橋富貴子氏が性的性向語彙のところで述べたお茶の水女子大生53名に読み聞かせ方式で回答してもらったものの集計結果である。(青年層の数字と同じく百分比を示す。)読み聞かせ方式で女子学生だけに回答してもらったものだから, 青年層の回答と同じ平面に置いて比較することは出来ない。それでも, 青年層の回答との間に共通する点が非常に多いのは, 注意すべきである。ただ一つ「オシャベリナ」の回答の集計がなかったため, のせることができなかつたことをお断わりしておく。

第19表 口数が多い・少ないを意味する性向語彙
 (イ) 口数が多いを意味する5語

		青年層 中老年層				青年層 中老年層	
		%	%			%	%
口 が 軽 い	-	97.2(98.1)	98.1	多 弁 ナ	-	46.9 (43.4)	69.8
	+	0.5	0.6		+	10.5 (13.2)	2.5
	-+	0.7(1.9)			-+	17.2 (30.2)	11.3
	0	0.5	0.6		0	18.4 (9.4)	10.1
	?	0.9			?	6.5 (3.8)	5.0
	無答	0.2	0.6		無答	0.5	1.3
オ シ ヤ ベ リ ナ	-	88.1	86.8	口 マ メ ナ	-	18.0 (22.6)	27.0
	+	0.7			+	21.7 (20.8)	16.4
	-+	5.1	3.8		-+	21.7 (32.1)	22.0
	0	3.7	1.9		0	20.5 (1.9)	17.0
	?	2.1	1.9		?	15.6 (22.6)	14.5
	無答	0.2	5.7		無答	2.6	3.1
饒 舌 ナ	-	49.0 (47.2)	87.4				
	+	9.1 (11.3)	0.6				
	-+	10.7 (13.2)	1.3				
	0	11.2 (5.7)	0.6				
	?	16.1 (22.6)	6.3				
	無答	4.0	3.8				

第19表 (ロ) 口数が少ないを意味する4語

		青年層 中老年層				青年層 中老年層	
		%	%			%	%
口 ガ 重 イ	-	8.2 (9.4)	10.1	寡 黙 ナ	-	11.7 (5.7)	6.3
	+	37.8 (18.9)	27.0		+	24.2 (17.0)	37.7
	-+	29.1 (41.5)	27.0		-+	11.4 (22.6)	8.8
	0	19.6 (26.4)	30.8		0	27.0 (26.4)	32.7
	?	5.1 (3.8)	4.4		?	23.8 (28.3)	10.1
	無答	0.2	0.6		無答	1.9	4.4
無 口 ナ	-	12.6 (11.3)	13.2	ダ ン マ リ	-	69.0 (67.9)	45.3
	+	7.5	8.2		+	1.9 (3.8)	3.1
	-+	21.4 (28.3)	28.3		-+	7.2 (13.2)	11.9
	0	51.0 (52.8)	46.5		0	15.4 (11.3)	32.7
	?	7.5 (7.5)	3.1		?	6.1 (3.8)	6.3
	無答		0.6		無答	0.5	0.6

第19表 (ハ) 1語の平均

	口数が多いを意味する 5語の平均		口数が少ないを意味する 4語の平均		9語全体の平均	
	青年層	中老年層	青年層	中老年層	青年層	中老年層
-	% 59.8	% 73.8	% 25.4	% 18.7	% 44.5	% 49.3
+	8.5	4.0	17.9	19.0	12.7	10.7
-+	11.1	7.7	17.3	19.0	13.8	12.7
0	10.9	6.0	28.3	35.7	18.6	19.2
?	8.2	5.5	10.6	6.0	9.3	5.7
無答	1.5	2.9	0.7	1.6	1.1	2.3

第20表 話し・聞くがじょうず・へたを意味する性向語彙
 (イ) じょうずを意味する8語

		青年層 中老年層				青年層 中老年層	
		%	%			%	%
話し ジョーズナ	－	1.9		口 ガ 達 者 ナ	－	38.0 (34.0)	39.0
	＋	83.7 (86.8)	78.0		＋	13.5 (7.5)	9.4
	－＋	10.5 (11.3)	15.1		－＋	35.4 (58.5)	37.1
	0	1.2 (1.9)	6.3		0	8.6	8.8
	?	2.6			?	4.2	4.4
	無答	0.2	0.6		無答	0.2	1.3
聞 キ ジョーズナ	－	2.3	0.6	口 ジ ョ ー ズ ナ	－	56.9 (54.7)	68.6
	＋	89.3 (86.8)	88.7		＋	5.1 (1.9)	5.0
	－＋	4.2 (11.3)	2.5		－＋	30.5 (39.6)	20.8
	0	2.1 (1.9)	6.9		0	2.1 (1.9)	1.3
	?	1.9	0.6		?	5.1 (1.9)	4.4
	無答	0.2	0.6		無答	0.2	
能 弁 ナ	－	8.2 (5.7)	7.5	口 巧 者 ナ	－	42.2 (50.9)	55.3
	＋	66.7 (73.6)	54.1		＋	15.4 (11.3)	8.8
	－＋	11.7 (18.9)	21.4		－＋	24.2 (22.6)	23.3
	0	6.3	11.3		0	8.2	4.4
	?	7.0 (1.9)	3.8		?	8.4 (15.1)	4.4
	無答	0.2	1.9		無答	1.6	3.8
雄 弁 ナ	－	3.7 (1.9)	3.8	口 八 丁 ノ	－	55.5 (69.8)	49.1
	＋	76.7 (67.9)	65.4		＋	6.3 (1.9)	10.7
	－＋	11.4 (28.3)	16.4		－＋	21.9 (18.9)	30.8
	0	4.9 (1.9)	13.2		0	9.1 (1.9)	4.4
	?	3.0	0.6		?	6.8 (7.5)	4.4
	無答	0.2	0.6		無答	0.5	0.6

第20表 (口)へたを意味する3語

		青年層 中老年層				青年層 中老年層	
		%	%			%	%
話 シ ベ タ ナ	-	46.9 (32.1)	54.7	ト ツ 弁 ナ	-	28.4 (22.6)	25.2
	+	4.2 (1.9)	2.5		+	9.1 (7.5)	6.3
	-+	11.0 (28.3)	10.7		-+	11.7 (22.6)	21.4
	0	29.8 (32.1)	27.0		0	21.4 (20.8)	40.3
	?	7.9 (5.7)	3.8		?	25.9 (26.4)	6.3
	無答	0.2	1.3		無答	3.5	0.6
口 ベ タ ナ	-	40.3 (28.3)	44.0				
	+	7.2 (1.9)	6.3				
	-+	13.3 (24.5)	18.2				
	0	31.0 (35.8)	24.5				
	?	7.2 (9.4)	6.3				
	無答	0.9	0.6				

第20表 (ハ) 1語の平均

	じょうずを意味する 8語の平均		へたを意味する 3語の平均		11語全体の平均	
	青年層	中老年層	青年層	中老年層	青年層	中老年層
	%	%	%	%	%	%
-	26.1	28.0	38.5	41.3	29.5	31.6
+	44.6	40.0	6.8	5.0	34.3	30.5
-+	18.7	20.9	12.0	16.8	16.9	19.8
0	5.3	7.1	27.4	30.6	11.3	13.5
?	4.9	2.8	13.9	5.5	7.3	3.5
無答	0.4	1.2	1.5	0.8	0.7	1.1

第21表 その他

話し好キナ		青年層	中老年層
		%	%
	-	7.5(1.9)	6.3
	+	32.4(35.8)	23.3
	-+	22.6(39.6)	26.4
	0	34.5(22.6)	40.9
	?	3.0	1.3
	無答		1.9

第22表 20語および21語の平均

20語の平均		青年層	中老年層	21語の平均		青年層	中老年層
		%	%			%	%
	-	36.3	39.6		-	34.9	38.0
	+	24.6	21.6		+	24.9	21.6
	-+	15.5	16.6		-+	15.9	17.1
	0	14.6	16.1		0	15.5	17.2
	?	8.2	4.5		?	7.9	4.4
	無答	0.9	1.6		無答	0.9	1.6

第23表 21語の選択肢別支持率順位表

(イ) 一の選択肢支持率の場合

青 年 層			中 ・ 老 年 層		
(順位)	(支持率)			(支持率)	(順位)
	%			%	
(1)	(97.2)	口ガ軽イ	—————	口ガ軽イ	(98.1) (1)
(2)	(88.1)	オシャベリナ	—————	饒舌ナ	(87.4) (2)
(3)	(69.0)	ダンマリ	—————	オシャベリナ	(86.8) (3)
(4)	(56.9)	口ジョーズナ	—————	多弁ナ	(69.8) (4)
(5)	(55.5)	口八丁ノ	—————	口ジョーズナ	(68.6) (5)
(6)	(49.0)	饒舌ナ	—————	口巧者ナ	(55.3) (6)
(7.5)	(46.9)	多弁ナ	—————	話シベタナ	(54.7) (7)
(7.5)	(46.9)	話シベタナ	—————	口八丁ノ	(49.1) (8)
(9)	(42.2)	口巧者ナ	—————	ダンマリ	(45.3) (9)
(10)	(40.3)	口ベタナ	—————	口ベタナ	(44.0) (10)
(11)	(38.0)	口ガ達者ナ	—————	口ガ達者ナ	(39.0) (11)
(12)	(28.4)	トツ弁ナ	—————	口マメナ	(27.0) (12)
(13)	(18.0)	口マメナ	—————	トツ弁ナ	(25.2) (13)
(14)	(12.6)	無口ナ	—————	無口ナ	(13.2) (14)
(15)	(11.7)	寡黙ナ	—————	口ガ重イ	(10.1) (15)
(16.5)	(8.2)	能弁ナ	—————	能弁ナ	(7.5) (16)
(16.5)	(8.2)	口ガ重イ	—————	寡黙ナ	(6.3) (17.5)
(18)	(7.5)	話シ好キナ	—————	話シ好キナ	(6.3) (17.5)
(19)	(3.7)	雄弁ナ	—————	雄弁ナ	(3.8) (19)
(20)	(2.3)	聞キジョーズナ	—————	聞キジョーズナ	(0.6) (20)
(21)	(1.9)	話シジョーズナ	—————	話シジョーズナ	(0) (21)

第23表(口) +の選択肢支持率の場合

青 年 層		中 ・ 老 年 層	
(順位)	(支持率)	(支持率)	(順位)
%		%	
(1)	(89.3) 聞キジョーズナ	聞キジョーズナ	(88.7) (1)
(2)	(83.7) 話シジョーズナ	話シジョーズナ	(78.0) (2)
(3)	(76.7) 雄 弁 ナ	雄 弁 ナ	(65.4) (3)
(4)	(66.7) 能 弁 ナ	能 弁 ナ	(54.1) (4)
(5)	(37.8) 口ガ重イ	寡 黙 ナ	(37.7) (5)
(6)	(32.4) 話シ好キナ	口ガ重イ	(27.0) (6)
(7)	(24.2) 寡 黙 ナ	話シ好キナ	(23.3) (7)
(8)	(21.7) 口マメナ	口マメナ	(16.4) (8)
(9)	(15.4) 口巧者ナ	口八丁ノ	(10.7) (9)
(10)	(13.5) 口ガ達者ナ	口ガ達者ナ	(9.4) (10)
(11)	(10.5) 多 弁 ナ	口巧者ナ	(8.8) (11)
(12.5)	(9.1) トツ弁ナ	無 口 ナ	(8.2) (12)
(12.5)	(9.1) 饒 舌 ナ	トツ弁ナ	(6.3) (13.5)
(14)	(7.5) 無 口 ナ	口ベタナ	(6.3) (13.5)
(15)	(7.2) 口ベタナ	口ジョーズナ	(5.0) (15)
(16)	(6.3) 口八丁ノ	ダンマリ	(3.1) (16)
(17)	(5.1) 口ジョーズナ	話シベタナ	(2.5) (17.5)
(18)	(4.2) 話シベタナ	多 弁 ナ	(2.5) (17.5)
(19)	(1.9) ダンマリ	口ガ軽イ	(0.6) (19.5)
(20)	(0.7) オシャベリナ	饒 舌 ナ	(0.6) (19.5)
(21)	(0.5) 口ガ軽イ	オシャベリナ	(0) (21)

第23表(ハ) 一十の選択肢支持率の場合

青 年 層			中 ・ 老 年 層		
(順位)	(支持率)			(支持率)	(順位)
	%			%	
(1)	(35.4)	口ガ達者ナ	口ガ達者ナ	(37.1)	(1)
(2)	(30.5)	口ジョーズナ	口八丁ノ	(30.8)	(2)
(3)	(29.1)	口ガ重イ	無 口 ナ	(28.3)	(3)
(4)	(24.2)	口巧者ナ	口ガ重イ	(27.0)	(4)
(5)	(22.6)	話シ好キナ	話シ好キナ	(26.4)	(5)
(6)	(21.9)	口八丁ノ	口巧者ナ	(23.3)	(6)
(7)	(21.7)	口マメナ	口マメナ	(22.0)	(7)
(8)	(21.4)	無 口 ナ	トツ弁ナ	(21.4)	(8.5)
(9)	(17.2)	多 弁 ナ	能 弁 ナ	(21.4)	(8.5)
(10)	(13.3)	口ベタナ	口ジョーズナ	(20.8)	(10)
(11.5)	(11.7)	トツ弁ナ	口ベタナ	(18.2)	(11)
(11.5)	(11.7)	能 弁 ナ	雄 弁 ナ	(16.4)	(12)
(13.5)	(11.4)	雄 弁 ナ	話シジョーズナ	(15.1)	(13)
(13.5)	(11.4)	寡 黙 ナ	ダンマリ	(11.9)	(14)
(15)	(11.0)	話シベタナ	多 弁 ナ	(11.3)	(15)
(16)	(10.7)	饒 舌 ナ	話シベタナ	(10.7)	(16)
(17)	(10.5)	話シジョーズナ	寡 黙 ナ	(8.8)	(17)
(18)	(7.2)	ダンマリ	オシャベリナ	(3.8)	(18)
(19)	(5.1)	オシャベリナ	聞キジョーズナ	(2.5)	(19)
(20)	(4.2)	聞キジョーズナ	饒 舌 ナ	(1.3)	(20)
(21)	(0.7)	口ガ軽イ	口ガ軽イ	(0)	(21)

第23表(二) 0の選択肢支持率の場合

青 年 層			中 ・ 老 年 層		
(順位)	(支持率)			(支持率)	(順位)
	%			%	
(1)	(51.0)	無 口 ナ	無 口 ナ	(46.5)	(1)
(2)	(34.5)	話シ好キナ	話シ好キナ	(40.9)	(2)
(3)	(31.0)	口ベタナ	トツ弁ナ	(40.3)	(3)
(4)	(29.8)	話シベタナ	寡 黙 ナ	(32.7)	(4.5)
(5)	(27.0)	寡 黙 ナ	ダンマリ	(32.7)	(4.5)
(6)	(21.4)	トツ弁ナ	口ガ重イ	(30.8)	(6)
(7)	(20.5)	口マメナ	話シベタナ	(27.0)	(7)
(8)	(19.6)	口ガ重イ	口ベタナ	(24.5)	(8)
(9)	(18.4)	多 弁 ナ	口マメナ	(17.0)	(9)
(10)	(15.4)	ダンマリ	雄 弁 ナ	(13.2)	(10)
(11)	(11.2)	饒 舌 ナ	能 弁 ナ	(11.3)	(11)
(12)	(9.1)	口八丁ノ	多 弁 ナ	(10.1)	(12)
(13)	(8.6)	口ガ達者ナ	口ガ達者ナ	(8.8)	(13)
(14)	(8.2)	口巧者ナ	聞キジョーズナ	(6.9)	(14)
(15)	(6.3)	能 弁 ナ	話シジョーズナ	(6.3)	(15)
(16)	(4.9)	雄 弁 ナ	口八丁ノ	(4.4)	(16.5)
(17)	(3.7)	オシャベリナ	口巧者ナ	(4.4)	(16.5)
(18.5)	(2.1)	口ジョーズナ	オシャベリナ	(1.9)	(18)
(18.5)	(2.1)	聞キジョーズナ	口ジョーズナ	(1.3)	(19)
(20)	(1.2)	話シジョーズナ	口ガ軽イ	(0.6)	(20.5)
(21)	(0.5)	口ガ軽イ	饒 舌 ナ	(0.6)	(20.5)

第23表(ホ) ?の選択肢支持率の場合

青 年 層		中 ・ 老 年 層	
(順位)	(支持率) %	(支持率) %	(順位)
(1)	(25.9)	ト ツ 弁 ナ	口 マ メ ナ (14.5) (1)
(2)	(23.8)	寡 黙 ナ	寡 黙 ナ (10.1) (2)
(3)	(16.1)	饒 舌 ナ	饒 舌 ナ (6.3) (4.5)
(4)	(15.6)	口 マ メ ナ	ト ツ 弁 ナ (6.3) (4.5)
(5)	(8.4)	口 巧 者 ナ	ダ ン マ リ (6.3) (4.5)
(6)	(7.9)	話 シ ベ タ ナ	口 ベ タ ナ (6.3) (4.5)
(7)	(7.5)	無 口 ナ	多 弁 ナ (5.0) (7)
(8)	(7.2)	口 ベ タ ナ	口 巧 者 ナ (4.4) (10)
(9)	(7.0)	能 弁 ナ	口 ジ ョ ー ズ ナ (4.4) (10)
(10)	(6.8)	口 八 丁 ノ	口 八 丁 ノ (4.4) (10)
(11)	(6.5)	多 弁 ナ	口 ガ 重 イ (4.4) (10)
(12)	(6.1)	ダ ン マ リ	口 ガ 達 者 ナ (4.4) (10)
(13.5)	(5.1)	口 ジ ョ ー ズ ナ	能 弁 ナ (3.8) (13.5)
(13.5)	(5.1)	口 ガ 重 イ	話 シ ベ タ ナ (3.8) (13.5)
(15)	(4.2)	口 ガ 達 者 ナ	無 口 ナ (3.1) (15)
(16.5)	(3.0)	雄 弁 ナ	オ シ ャ ベ リ ナ (1.9) (16)
(16.5)	(3.0)	話 シ 好 キ ナ	話 シ 好 キ ナ (1.3) (17)
(18)	(2.6)	話 シ ジ ョ ー ズ ナ	聞 キ ジ ョ ー ズ ナ (0.6) (18.5)
(19)	(2.1)	オ シ ャ ベ リ ナ	雄 弁 ナ (0.6) (18.5)
(20)	(1.9)	聞 キ ジ ョ ー ズ ナ	話 シ ジ ョ ー ズ ナ (0) (20.5)
(21)	(0.9)	口 ガ 軽 イ	口 ガ 軽 イ (0) (20.5)

以上、第19表から第23表までの13の表、それに後出の第24表と第25表をもとにして、次のことを指摘することができる。くわしくは、以下順を追って記述することにする。

- (1) プラスの評価よりもマイナスの評価で使う語のほうが多い、という傾向がある。
 - (2) この傾向は、口数が多いを意味する語群で最も強く、次いで話し・聞くがへたを意味する語群、話し・聞くがじょうずを意味する語群の順となる。そして、口数が少ないを意味する語群で、この傾向は最も弱くなる。(76 ページ以下に記述。)
 - (3) 同一の語群の中でも、語によって選択肢支持の傾向がかなり違う場合が多い。(78 ページ以下に記述。)
 - (4) 世代間の比較をすると、相対的にいって、中・老年層は青年層よりも「口数が少ない」のほうに回答が多く集まり、青年層は中・老年層よりも「口数が多い」のほうに回答が多く集まっている。(86 ページ以下に記述。)
- (1) プラスの評価よりもマイナスの評価で使う語のほうが多い。——第23表(イ)ロ(ハ)(ニ)(ホ)で、-・+・-+・0・?の選択肢支持率が25%以上のものを拾いあげてみると、下のようになる。(ただし「話シ好キナ」を除く。)
- の選択肢支持率が25%以上のもの

青年層 12語

口ガ軽イ (97.2%) ・ オシャベリナ (88.1%) ・ ダンマリ (69.0%) ・
口ジョーズナ (56.9%) ・ 口八丁ノ (55.5%) 饒舌ナ (49.0%) ・
多弁ナ (46.9%) ・ 話シベタナ (46.9%) ・ 口巧者ナ (42.2%) ・
口ベタナ (40.3%) ・ 口ガ達者ナ (38.0%) ・ トツ弁ナ (28.4%)

中・老年層 13語

口ガ軽イ (98.1%) ・ 饒舌ナ (87.4%) ・ オシャベリナ (86.8%) ・
多弁ナ (69.8%) ・ 口ジョーズナ (68.6%) ・ 口巧者ナ (55.3%) ・
話シベタナ (54.7%) ・ 口八丁ノ (49.1%) ・ ダンマリ (45.3%) ・
口ベタナ (44.0%) ・ 口ガ達者ナ (39.0%) ・ 口マメナ (27.0%) ・

トツ弁ナ (25.2%)

＋の選択肢支持率が25%以上のもの

青年層 5語

聞キジョーズナ (89.3%) ・話シジョーズナ (83.7%) ・雄弁ナ (76.7%)
・能弁ナ (66.7%) ・ロガ重イ (37.8%)

中・老年層 6語

聞キジョーズナ (88.7%) ・話シジョーズナ (78.0%) ・雄弁ナ (65.4%)
・能弁ナ (54.1%) ・寡黙ナ (37.7%) ・ロガ重イ (27.0%)

－＋の選択肢支持率が25%以上のもの

青年層 3語

ロガ達者ナ (35.4%) ・ロジョーズナ (30.5%) ・ロガ重イ (29.1%)

中・老年層 4語

ロガ達者ナ (37.1%) ・ロ八丁ノ (30.8%) ・無口ナ (28.3%) ・
ロガ重イ (27.0%)

0の選択肢支持率が25%以上のもの

青年層 4語

無口ナ (51.0%) ・ロベタナ (31.0%) ・話シベタナ (29.8%) ・
寡黙ナ (27.0%)

中・老年層 6語

無口ナ (46.5%) ・寡黙ナ (32.7%) ・トツ弁ナ (40.3%) ・
ダンマリ (32.7%) ・ロガ重イ (30.8%) ・話シベタナ (27.0%)

？の選択肢支持率が25%以上のもの

青年層 1語

トツ弁ナ (25.9%)

中・老年層 なし

すなわち、人間の性格を口数が多い・少ない、話し・聞くがじょうず・へたという観点から評価記述するのに使われる20の形容詞的性向語彙のうち、マイナスの評価で使われることが多いものは、青年層で12語、中・老年層で13語もある。(仮に、支持率25%以上をもって「多い」と考える。)

これに対して、プラスの評価で使われることが多いものは、青年層で5語、中・老年層で6語しかない。プラスの評価で使う場合とマイナスの評価で使う場合が同じくらいのもの（-+）や、プラス・マイナスの評価の気持とは無関係の場合が多いというもの（0）や、なんともいえないというもの（?）は、それよりもさらに少ない。

上に述べた関係は、第22表にもはっきりと現れている。20語の一語あたり平均選択支持率は、青年層も中・老年層も-が最も高い。+は、-に比してかなり低く、以下-+・0・?の順に低くなっていく。

つまり、口数が多いか少ないか、話し・聞かざるがへたかへたかということを表わす形容詞的性向語彙は、その全体的な意味用法の構造がプラスよりマイナスの方向に深く傾斜しているのだ。これは、セックスに関する形容詞性向語彙の場合と全く同じである。

(2) (1)で述べた、プラスの評価よりもマイナスの評価で使う語のほうが多いという傾向は、口数が多いを意味する語群で最も強い。次いで話し・聞かざるを意味する語群、同じょうずを意味する語群の順となる。そして、口数が少ないを意味する語群で、この傾向は最も弱くなるのである。——第19表(イ)と第20表(イ)で、各語群の1の選択肢支持率の1語平均値を比較すると、下のようになる。口数が多いを意味する語群の平均値が青年層で59.8%、中・老年層で73.8%と、とびぬけて高いことに注目してほしい。次いで20~30%の開きをもってへたを意味する語群、さらに10%の開きをもってじょうずを意味する語群が位置し、口数が少ないを

一の選択肢支持率の平均値の比較

青 年 層			中 ・ 老 年 層		
順位		支持率	順位		支持率
1	口数が多いを意味する 5語	59.8	1	口数が多いを意味する 5語	73.8
2	へたを意味する3語	38.5	2	へたを意味する3語	41.3
3	じょうずを意味する 8語	26.1	3	じょうずを意味する 8語	28.0
4	口数が少ないを意味 する4語	25.4	4	口数が少ないを意味 する4語	18.7

意味する語群は、わずか18～25%で最下位に位置している。

上に述べた傾向は、第23表(イ)にもまたはっきりと現われている。この表で、中・老年層の一の選択肢支持率上位13語（支持率25%以上）には、口数が多いを意味する5語が全部はいっている。なかでも、「口が軽イ（98.1%）・饒舌ナ（87.4%）・オシャベリナ（86.8%）・多弁ナ（69.8%）」の4語は、1位から4位をずらりとしめている。残る「ロマメナ（27.0%）」も12位をしめている。

話し・聞くがへたを意味する3語も全部上位13語の中にはいっているが、こちらは、「話シベタナ（54.7%）」が7位、「ロベタナ（44.0%）」が10位、「トツ弁ナ（25.2%）」が13位でしかない。上位13語に全部がはいっているとはいっても、13語全体の中にしめる重みは、ぐんと低い。また、話し・聞くがじょうずを意味する語は、全体で8語あるうち半数の4語がはいっているだけである。（「ロジョーズナ（68.6%）」が5位、「口巧者ナ（55.3%）」が6位、「口八丁ノ（49.1%）」が8位、「口ガ達者ナ（39.0%）」が11位。）そして、最後に、口数が少ないを意味する語は、全体で4語あるうち、わずかに「ダンマリ（45.3%）」が9位をしめているだけにすぎないのだ。

青年層でも、口数が多いを意味する5語のうち、「ロマメナ（18.0%）」（13位）が上位12語（支持率25%以上）の枠からはみでているが、残りの4語は、「口ガ軽イ（97.2%）」（1位）・「オシャベリナ（88.1%）」（2位）・「饒舌ナ（49.0%）」（6位）・「多弁ナ（46.9%）」（7.5位）と全部上位をしめている。へたを意味する語は、3語が全部上位12語の語の中にはいってはいるが、「話シベタナ（46.9%）」が7.5位、「ロベタナ（40.3%）」が10位、「トツ弁ナ（28.4%）」が12位と、上位12語の中でも占める位置が相対的に下位である。じょうずを意味する語は8語のうち半数の4語が、そして口数が少ないを意味する語は4語のうちわずかに1語だけがはいっている。これは、中・老年層の場合と全く同じである。

つまり、1語あたりの平均値でみた場合も、一つ一つ語別にみた場合も、マイナスの評価で使われる傾向は、口数が多いを意味する語群で最も強いことがわかる。次いでへたを意味する語群、じょうずを意味する語群の順となり、口

数が少ないを意味する語群では、この傾向が最も微弱になるのだ。そして、このことは、青年層よりも中・老年層において顕著にあらわれているということになる。

(3) 同一の語群の中でも、語によって選択肢支持の傾向がかなり違う場合が多い。

(イ) 口数が多いを意味する5語の場合

第19表(イ)をみると、「ロカ軽イ」は、青年層も中・老年層も、それにお茶の水女子大生のグループも、一の選択肢支持率が100%に近い。いわば、どれもほぼ完全な一の選択肢集中型である。「オシャベリナ」も、一の選択肢支持率が二つの世代ともに90%に近く、「ロカ軽イ」に次ぐ一の選択肢集中型になっている。ところが残りの3語は、次の点で選択肢支持の傾向がかなり違う。

(A) 「饒舌ナ・多弁ナ」の2語は、中・老年層では一の選択肢支持率が非常に高い(87.4%と69.8%)のに、青年層ではそれと比べるとかなり低い(49.0%と46.9%)。お茶の水女子大生のグループも同じだ(47.2%と43.4%)。そして、どちらの場合も、その分だけ+・-・+・0・?などの選択肢支持率が増えている。

この事実をそのまま素直に受けとれば、青年層にとっては、「アノ人ワ ロカ軽イ(・オシャベリナ) 人ダ。」と言った場合と、「アノ人ワ 饒舌ナ(・多弁ナ) 人ダ。」と言った場合とでは、その口数が多いということに対する評価の気持がたいへん違うことになる。また、青年層と中・老年層の間で、「アノ人ワ ロカ軽イ(・オシャベリナ) 人ダ。」と言った場合には、その口数が多いということに対する評価の気持に違いが少しもないのに、「アノ人ワ 饒舌ナ(・多弁ナ) 人ダ。」と言った場合には大きな違いが現れる、ということになる。話しことば的なものと書きことば的なものの違い、または和語と漢語の違いといったものが影響しているのかも知れない。類義語の使い分けの上で、一つの問題を出したことになる。

(B) 「ロマメナ」は、中・老年層も青年層も、それにお茶の水女子大生のグループも、一の選択肢支持率が非常に低く(それぞれ27.0%・18.0%と22.6%)、選択肢支持の状況がほかの4語とは全く違う。これもそのまま素直に受けとれば、青年層も中・老年層も、「アノ人ワ ロマメナ 人ダ。」と言った場合と、

「アノ人ワ ロガ軽イ（・オシャベリナ・饒舌ナ・多弁ナ）人ダ」と言った場合とは、「アノ人」の口数が多いという性向に対する評価の気持ちがたいへん違うということになる。

このことは類義語の使い分けに関係する問題であり、わたしにはたいへん興味があった。そこで、中・老年層159名をさらに国語の専門研究者（32名）とそれ以外の一般社会人（127名）に分けて、その間に違いがあるかどうかを見てみた。しかし、結果は下のとおり。研究者の言語感覚は、同世代の一般社会人や青年層・お茶の水女子大生グループの若い世代の言語感覚とほとんど違っていなかった。「ロマメナ」の「マメ」がもっている本来の意味がそうさせるのだろうか。つまり「まめに働く」「まめな人」「足まめ」「手まめ」「筆まめ」……などの「マメ」がもっている本来の意味である。

中・老年層内での「ロマメナ」の選択肢支持率の比較

	研究者(32名)	一般社会人(127名)
—	21.9 [%]	28.3 [%]
+	18.8	15.7
—+	21.9	22.0
0	12.5	18.1
?	21.9	12.6
無答	3.1	3.1

これも同義・類義の語の使いわけの問題に関係する。しかし、多くの国語辞書は、この辺のことは余り触れていないようだ。以下に、いくつかその事例をあげる。

岩波国語辞典（初版）

くちがる すらすら物を言うさま。転じて、軽々しく物を言うこと。特に秘密

をすぐ人にもらすこと。↔口重（くちおも）

おしゃべり 口数の多いこと。また、そういう人。

饒舌 よくしゃべること。「饒」はあり余る意。

多弁 口数が多いこと。よくしゃべること。

口まめ よくしゃべること。またその人。

明解国語辞典

くちがる ①びんしょうに口をきくこと。②かるがるしくものをいうこと。③よく秘密を他にもらすこと。

おしゃべり よくしゃべる・こと(人)。

饒舌 多弁なこと。おしゃべり。

多弁 口数が多いこと。多言。

口まめ よくしゃべる・こと(人)。

例解国語辞典

口が軽い 何でもべらべらとしゃべりたがって、言っではいけないことでも言ってしまう。多弁である。

おしゃべり ①人と話をする事。「ちょっと——(を)するうちに時間になった」②べらべらとしゃべりすぎる事。口数の多い人。饒舌。「——な女」「無口だった男が——になる」

饒舌 口数が多いこと。おしゃべり。多弁。「——を弄する」「——な(の)人」「——家」

多弁 おしゃべりなこと。口数が多いこと。「商人は一般に——で愛想がいい」

口まめ よくしゃべること・人。口かずの多いこと・人。「——の(な)子」

広辞苑(初版)

くちがる ①すらすらとものをいうこと。②よく考えないでかるがるしく物をいうこと。③不注意に秘密をよく他言すること。

おしゃべり 口かずの多いこと。また、その人。多弁家。

饒舌 多弁なこと。おしゃべり。(下略)

多弁 多くしゃべること。口数の多いこと。おしゃべり。饒舌。「——家」

口まめ よくしゃべること。また、その人。口かずの多いこと。また、その人。

大言海

くちがるし 物言ヒ、カルシ。ロキクコト、カロガロシ。(くちおもしノ反)
(下略)

おしゃべり 多弁ル者ヲ称スル、婦人語。

饒舌 又、ねうぜつ。クチマメ。多弁。多言。(下略)

多弁 多く物言フコト。クチマメ。オシャベリ。多言。饒舌。(下略)

口まめ ^{マメ} 忠ニ、物言フコト。ヨク、シャベルコト。多弁。饒舌。(下略)

大日本国語辞典

くちがるし 口のきき方かるし。物言ひ軽卒なり。不注意に口外す。多弁なり。

(くちおもしろの対) (下略)

おしゃべり よくしゃべること。又其の人。多弁。

饒舌 口数の多きこと。おしゃべり。多弁。ねうぜつ。(下略)

多弁 多く物をいふこと。口数の多きこと。くちまめ。饒舌。(下略)

口まめ まめに口をきくこと。口数多きこと。又其の人。(下略)

[記]

参考までに、「アノ人ワ ロマメナ 人ダ」の設問に対する選択肢支持に注記をつけてあったものを全部そのままぬき出してみると、下のようになる。注記をしてあったのは6名。一人を除いて、他は全部国語の専門研究者であった。中・老年層の国語の専門研究者がこういう注記をつけてあるところをみると、この「ロマメナ」は、多くの現代語辞書にはのっていても、現在では余り使用されていないことばであるらしい。

回答者	支持選択肢	注記の内容
国語学者(男)	無答	このことば わからぬ。
国語教育学者(女)	オ (?)	このことばは聞かない。自分も使わない。
国語教育学者(女)	オ (?)	足まめ・手まめほどには使わない。
国語学者(女)	オ (?)	使わないので。
国語学者(男)	イ (+)	ただし、私にはあまり親しみのない表現です。
一般社会人(男)	イ (+)	小生は、この言い方はまず用いない。

(ロ) 口数が少ないことを意味する4語の場合

第19表(ロ)をみると、「ロカ重イ・無口ナ・寡黙ナ」の3語は、どれも一の選択肢支持率が非常に低い。ところが、「ダンマリ」だけは青年層も中・老年層もお茶の水女子大生のグループも、おしなべて一の選択肢支持率が非常に高い(69.0%・45.3%と67.9%)。つまり「アノ人ワ ダンマリダ」と言った場合と、

「アノ人ワ ログ重イ（・寡黙ナ・無口ナ）人ダ。」と言った場合とでは、「アノ人」の口数の少ないという性向に対する評価の気持ちがたいへん違うことになる。

また、「ログ重イ・寡黙ナ」と「無口ナ」とでは、前者は十の選択肢支持率がかかなり高いのに、後者はたいへん低い。青年層も中・老年層もお茶の水女子大生もそうである。「ダンマリ」も十の選択肢支持率が低い。だから、これもそのまま素直に受けとれば、「アノ人ワ ログ重イ（・寡黙ナ）人ダ。」と言った場合と、「アノ人ワ 無口ナ 人ダ」「アノ人ワ ダンマリダ。」と言った場合とでは、その口数が少ないことに対するプラスの評価の気持ちにずれが生じていることになる。

念のため、これもまた中・老年層を研究者とそれ以外の一般社会人とに分けて、両者の言語感覚に違いがあるかどうかを見てみた。しかし、結果は下のとおり。「無口ナ」は－と0の選択肢のところ違いがあるが、「ダンマリ」のほうは違いが全くないといってよいくらいである。

中・老年層内での選択肢支持率の比較

「ダンマリ」			「無口ナ」		
	研究者 (32名)	一般社会人 (127名)		研究者 (32名)	一般社会人 (127名)
－	43.8%	45.7%	－	3.1%	15.7%
＋	3.1	3.1	＋	12.5	7.1
－＋	12.5	11.8	－＋	21.9	29.9
0	31.3	33.1	0	59.4	43.3
?	9.4	5.5	?	3.1	3.1
無答	0	0.8	無答		0.8

これも類義語の使いわけに関係したことだが、多くの国語辞書はこの辺のことにはあまり触れていないようだ。いくつかの例を次にあげる。

岩波国語辞典（初版）

口が重い おしゃべりでない。

無口 しゃべり方が少ないこと。また、その人。

寡黙 言葉数が少ないこと。

だんまり ①だまったままであること。また、だまっていて、めったに口をき

かない人。(下略)

明解国語辞典

口重い ①口のきき方がはっきりしない。②うかつにものを言わない。

無口 口数の少ないこと。寡言。

寡黙 ことば数が少ない。

だんまり ①だまること。無言。②ことわらないこと。無断。(下略)

例解国語辞典

口が重い ①言葉数が少なくてあまりしゃべろうとしない。寡黙である。

無口 あまりしゃべらないこと。口数の少ないこと。「——の(な)人」「彼は——で人とあまり付き合わない」

寡黙 口数が少なく、だまっていておしゃべりでないこと。「——の人」「——を尊ぶ」

だんまり ①黙って何も言わないこと・者。「——ではお前の気持がわからない」「——もいい加減にしろ」「おい——、何とか言え」(下略)

広辞苑(初版)

口重し ①ことばが口軽く出ない。②軽々しくものをいわぬ。③いうのを憚る。

無口 口数の少いこと。寡言。寡黙。

寡黙 言葉数の少いこと。寡言。

だんまり ①黙っていること。無言。(下略)

〔記〕

「アノ人ワ ダンマリダ。」について、中・老年層のあるかたは、エ(0)の選択肢を支持して、「これは性格ではなく、一時的な状態に使うような気がする」と注記してあった。

また、別のある中・老年層のかたは、この設問について、オ(?)の選択肢を支持し、「私にはあまり親しみがないので。ただし、「ダンマリボウダ」なら、エ(0)の選択肢を支持する」と注記してあった。

㍻) 話し・聞くがじょうずを意味する8語の場合

第20表(イ)をみると、「話シジョーズナ・聞キジョーズナ・能弁ナ・雄弁ナ」の4語のグループは、一の選択肢支持率が非常に低く、+の選択肢支持率が非

常に高い。いっぽう「口が達者ナ・ロジョーズナ・口巧者ナ・口八丁ノ」の4語のグループは、-の選択肢が高くて、+の選択肢が低い。二つのグループは、話し・聞くことがじょうずだ、と評価する点では同じだが、それをプラス・マイナスどちらの立場から評価するかという点で、たいへん違うことになる。類義語の使い分けの上で大事なことだが、これは、多くの国語辞書でかなりよく説明されている。例解国語辞典の例を下にあげる。

話しじょうず 見出し語になし。

聞きじょうず 相手の話を聞きながら、うまく受け答えして、相手に十分に話をさせることができること・人。「——の〔な〕人は、話もうまい」

能弁 〔「訥弁」の対〕普通の人より話がうまくて、よくしゃべること。「——に魅せられる」「——家」

雄弁 力強く、すらすらとよどみなくしゃべること。またその話。「事実が——に物語っている」「——な〔の〕代議士」「——を振るう」「——家」

口達者 ①よくしゃべること・人。「——な人」②口先のうまいこと・人。「本当に——で油断がならない」

口じょうず 口先がじょうずでうまいことばかり言い、相手を承服させること・人。口達者。口巧者。「——な男」

口巧者 見出し語になし。

口も八丁手も八丁 口がうまくて、しゃべることも上手だが、同時に実行の手腕も大いにあって仕事をてきぱきやってのけること。

+の選択肢支持率が最も高いのは、青年層も中・老年層も「聞キジョーズナ」であって、「話シジョーズナ」ではない。中・老年層の場合、この二つの語の+の選択肢支持率の間に約11%の開きがある。（「聞キジョーズナ」が88.7%で、「話シジョーズナ」が78.0%）。ことわざに「話しじょうずより聞きじょうず」「話しじょうずの聞きべた」というのがある。聞きじょうずと話しじょうずに対するこの価値観のちがいがこのような数字の開きになってあらわれているのだろう。

〔記〕

(1) 「アノ人ワ 口八丁ノ 人ダ」の設問について、中・老年層の6名のか

た(うち5名は国語学者)の回答に、「ロ八丁」を単独で使うのではなく、「ロ八丁, 手八丁」または「口も八丁, 手も八丁」の形で使うのが本当ではないか、という趣旨の注記がついていた。わたしとしては、「ロ八丁, 手八丁」から意識的に「ロ八丁」だけを分離して設問をつくったのだが、これには、やはり無理があったようである。

(2) 「アノ人ワ ロジョーズナ 人ダ」については、中・老年層の2名のかた(うち1名は国語学者)から、「ロジョーズナ」ではなく、「ロノ ジョーズナ」と格助詞をいれて使う、という注記をいただいた。また、2名の国語学者は、この語は自分の使用語彙にはないと注記していた。

(3) 「アノ人ワ ロ巧者ナ 人ダ」については、中・老年層の5名のかた(全部国語学者)から、この語は自分の使用語彙にはない・あまり聞かない・知らない、などという注記をいただいた。

(二) 話し・聞くがへたを意味する3語の場合

第20表(ロ)をみると、「話シベタナ・ロベタナ」の2語は、青年層、中・老年ともに-の選択肢支持率が40~55%あるのに、「トツ弁ナ」は25~28%しかない。その代りに、その分だけ+・-+・0・?や無答が増えている。これも念のため、中・老年層159名を研究者とそれ以外の一般社会人とに分けて、その間に違いがあるかどうかをみた。結果は、下のとおりに。そんなに大きな違いはない。

「トツ弁ナ」の選択肢支持率の比較

	研究者(32名)	一般社会人
-	28.1%	24.4%
+	3.1	7.1
-+	34.4	18.1
0	31.3	42.7
?	3.1	7.1
無答	0	0.8

(記)

「アノ人ワ 話シベタナ 人ダ」について、ある中・老年層のかたは、ウ(-+)の選択肢を支持して、「弁護したい時と批難したい時とある。」と注記して

あった。このかたは、「アノ人ワ ロベタナ 人ダ」についても、ウ（－＋）の選択肢を支持して、次のように注記してあった。

第7問（「話シベタナ」）と似ているが、どちらかというところ、「話シベタナ」のほうに多くマイナスを感じる。

また、中・老年層の別のあるかたは、この設問についてウ（－＋）の選択肢を支持して、次のように注記してあった。

マイナスの評価めいた気持が働く場合と、プラスの評価めいた気持が働く場合とがある。但し、話しべたをプラスとするのではなく、内容がある、or 誠実であるにも拘らず、話しべただというのであって、話すという点に関する限りではア（－）の選択肢を支持する。「アノ人ワ ロベタナ 人ダ」についても、これと全く同じことが言える。「アノ人ワ ロガ 達者ナ 人ダ」については、これと裏返しのことと言える。

(4) 世代間の比較をすると、相対的にいって、中・老年層は青年層よりも「口数が少ない」のほうに回答が多く集まり、青年層は中・老年層よりも「口数が多い」のほうに回答が多く集まっている。——ここで、第22問と第23問の集計結果を示すと、第24表と第25表のようになる。表中各欄の数字は、当該選択肢を支持した者が全体に対して占める百分比である。（空欄は、0パーセントであることを示す。）

第24表 あなたは、ごく一般的に言って、口数の多いタイプの人と、口数の少ないタイプの人とでは、どちらのほうが好きですか。どちらでもきらいだということでしたら、どちらのほうがよききらいでないですか。次のうち、あてはまるものを一つ選んで、○で囲んで下さい。

	青年層		中・老年層		青年層		中・老年層	
	男	女	男	女	男	女	男	女
ア. どちらかという人、口数の多いタイプの人のほうが好きだ。	17.0	17.5	6.9	16.5	4.1	14.9	9.4	9.4
ウ. どちらかという人、口数の多いタイプの人のほうがよききらいでない。	18.2	13.5	11.9	23.3	10.8	22.3	12.9	12.9
イ. どちらかという人、口数の少ないタイプの人のほうが好きだ。	27.5	25.6	38.4	29.6	39.2	60.8	37.6	37.6
エ. どちらかという人、口数の少ないタイプの人のほうがよききらいでない。	13.5	13.9	18.9	13.1	21.6	54.1	16.5	16.5
オ. どちらともいえない。	22.6	28.7	22.0	16.0	21.6		22.4	22.4
カ. わからない。	0.9	0.9	0.6	1.0	1.4		1.4	1.4
無答	0.2		1.3	0.5	1.4		1.2	1.2
全	429名	223名	159名	206名	74名	85名		85名

第25表 次に、あなた自身の性格について同わせて下さい。あなたは、自分の性格が口数の多いタイプだと思っ
ていますか。それとも、口数の少ないタイプだと思っ
ていますか。次のうち、あてはまるもの一つだけ選んで、○で囲んで下
さい。

	青年層		中・老年層		青年層		中・老年層	
	男	女	男	女	男	女	男	女
ア. 口数が多いタイプだと思 う。	14.7	7.5	13.0	16.5	9.5	5.9	35.2	33.0
イ. どちらかという と、まあ口数の多い タイプのほうだと思 う。	26.1	26.4	20.6	32.0	25.7	27.1	33.0	27.1
ウ. どちらともい えない。	19.1	17.6	20.6	17.5	13.5	21.2		
エ. どちらかとい うと、まあ口数の少 ないタイプのほうだ と思 う。	28.7	37.7	30.9	26.2	36.5	38.8	50.0	44.7
オ. 口数の少ない タイプだと思 う。	11.4	40.1	14.8	34.0	13.5	5.9	1.4	1.2
無 答		1.3						
全 体	429名	159名	223名	206名	74名	85名		

この二つの表から、次のことが指摘できる。

(A) 「どちらかというとき……」というのも含めて、「自分の性格は、口数が少ないタイプだ。」と答えているのは中・老年層のほうが多く、その反対に、「口数が多いタイプだ。」と答えているのは、青年層のほうが多い。中・老年層では、「口数が少ないタイプだ。」と答えた者は、「口数が多いタイプだ。」と答えた者よりもずっと多いが、青年層では、両者がほとんど同じである。つまり「口数が少ない」のほうへの傾斜の程度は、中・老年層のほうがきびしく、「口数が多い」のほうへの傾斜の程度は、青年層のほうがきびしい。(第25表)

(B) 「口数の少ないタイプの人のほうが好きだ。」または「きらいでない。」と答えたものは中・老年層のほうはずっと多く、その反対に、「口数の多いタイプの人のほうが好きだ。」または「きらいでない。」と答えたものは、青年層のほうはずっと多い。つまりここでも、相対的にいって、中・老年層は「口数が少ない」ほうに傾斜し、青年層は「多い」ほうに傾斜している。

(第24表)

第23問で答えた自分の性格のタイプと第22問で答えた好きな他人の性格のタイプとを対応させてみると、第26表(i)(ロ)(r)のようになる。表中各欄の数字は、それぞれの全体に対する百分比。空欄は0パーセント。

この表をみると、中・老年層では、自分の性格は、(r)「口数が多いタイプだ。」と答えた者も、(i)「どちらかというとき、まあ口数が多いタイプのほうだ。」と答えた者も、それに(ウ)「口数が多い・少ないのどちらともいえない。」と答えた者も、好きな他人の性格（「よりきらいでない」というのも含む。）としては、口数が少ないタイプを多くあげている。もちろん、自分の性格は「口数が少ないタイプだ。」と答えた者や、「どちらかというとき、まあ口数の少ないタイプのほうだ。」と答えた者は、好きな他人の性格として口数が少ないタイプを多くあげている。

ところが青年層では、自分の性格は、「口数が多いタイプだ。」と答えた者と「どちらかというとき、まあ口数が多いタイプのほうだ。」と答えた者は、好きな他人の性格としても、口数が多いタイプのほうを多くあげている。ここが中・老年層と違うところである。

第26表 自分の性格と他人の好きな性格との関係

(1) 自分の性格は、口数が多い(まあ多い)タイプだという人の場合

第22問 他人は～	第23問 自分は～		(1)どちらかというとき、まわりの口数の多いタイプだと思う。
	(7)口数が多いタイプだと思う。	(7)口数が多いタイプだと思う。	
	青年層	中・老年層	青年層
(7)どちらかというとき、口数の多いタイプの人のほうが好きだ。	33.3	16.7	19.6
(7)どちらかというとき、口数の多いタイプの人のほうがよきでない。	22.2	16.7	25.0
(7)どちらかというとき、口数の少ないタイプの人のほうが好きだ。	14.3	50.0	19.6
(7)どちらかというとき、口数の少ないタイプの人のほうがよきでない。	6.3	50.0	10.7
(7)どちらともいえない。	20.6	33.3	24.1
(7)わからない。	1.6		0.9
無答	1.6		
全 体	63名	12名	112名
			4.8
			23.8
			28.6
			45.3
			23.8
			2.4

(ロ) 自分の性格は、口数が少ない(まあ少ない)タイプだという人の場合

第22問 他人は～	第23問 自分は～		(ロ)口数の少ないタイプだと思 う。		(ハ)どちらかという人と、まあ口 数の少ないタイプのほうだ と思う。	
	青年層 %	中・老年層 %	青年層 %	中・老年層 %	青年層 %	中・老年層 %
(ア)どちらかという人、口数の多いタイプの人のほうが好きだ。	24.5	20.0	9.8	3.3	9.8	3.3
(イ)どちらかという人、口数の多いタイプの人のほうがよりにきらいでない。	10.2	6.7	13.0	6.7	13.0	6.7
(ウ)どちらかという人、口数の少ないタイプの人のほうが好きだ。	36.7	46.7	36.6	45.0	36.6	45.0
(エ)どちらかという人、口数の少ないタイプの人のほうがよりにきらいでない。	12.2	46.7	21.1	25.0	21.1	25.0
(オ)どちらかという人、口数の少ないタイプの人のほうがよりにきらいでない。	14.3	20.0	18.7	20.0	18.7	20.0
(カ)わからない。	2.0	6.7	0.8		0.8	
無答						
全	49名	15名	123名	60名	123名	60名

(イ) 自分の性格は、口数が多い・少ないのどちらともいえないという人の場合

第22問他人は～	第23問自分は～	
	青年層	中・老年層
(ア)どちらかという、口数の多いタイプの人のほうが好きだ。	7.1	7.3
(ウ)どちらかという、口数の多いタイプのほうがよりきらいでない。	14.3	18.3
(イ)どちらかという、口数の少ないタイプのほうが好きだ。	32.1	29.3
(エ)どちらかという、口数の少ないタイプの人のほうがよりきらいでない。	25.0	12.2
(オ)どちらともいえない。	21.4	
(カ)わからない。		
無 答		
全 体	28名	82名

自分は口数が多い性格（「どちらかというと……」というのも含む）だと認めていながら、他人は口数が多い人間よりも少ない人間のほうが好きだ（「よりきらいでない」というのも含む）というのは、つまり口数が多い性格よりも少ない性格のほうに好ましさを認めているからであるに違いない。この意味でも、中・老年層は、「口数が少ない」のほうへ傾斜している程度が青年層よりも強く、青年層は「口数が多い」のほうへ傾斜している程度が中・老年層よりも強い、ということが出来る。

第19表(イ)で、口数が多いを意味する5語のうち「口が軽い」と「オシャレリナ」は、青年層と中・老年層の間に違いは全くない。しかし、残りの「饒舌ナ・多弁ナ・ロマメナ」は、どれも－の選択肢は中・老年層のほうが高く、＋の選択肢は青年層のほうが高い。

また、第19表(ロ)で、口数が少ないを意味する4語のうち、「寡黙ナ」と「ダンマリ」は、＋の選択肢は中・老年層のほうが高く、－の選択肢は青年層のほうが高い。（ただし、「無口ナ」は二つの層の間で違いがほとんどなく、「口が重い」は、＋の選択肢が青年層のほうが高い。）

以上第19表(イ)(ロ)に述べたことを総合すれば、口数が多い・少ないを意味する語群の場合も、全体としては、どちらかといえば、中・老年層は「口数が少な

い」のほうに傾斜し、青年層は「口数が多い」のほうに傾斜している、ということができる。

第21表の「話し好きナ」も、－の選択肢は二つの層の間でほとんど違いはないが、＋の選択肢は青年層のほうが多い。だから、この場合も、どちらかといえば、青年層は「口数が多い」のほうに傾斜し、中・老年層は「口数が少ない」のほうに傾斜しているといえる。

3 まとめ

大学生である20歳前後の青年層429名、それにこれら大学生の親か祖父母の世代に相当する中・老年層159名。この159名の中には専門の国語研究者32名が含まれていた。わたしは、この異なる二つの世代のらびとにセックスに関する形容詞性向語彙のアンケートをお願いしたが、その際、ついでにそれと抱き合わせに言語活動に関する性向語彙のアンケートもお願いした。お願いしたのは形容詞的なもの全部で21語。その内容は次のとおりである。

- A 口数が多いか少ないかの観点から人間の性向を評価記述するのに使うもの—————9語
- B 話し・聞くのがじょうずかへたかの観点から人間の性向を評価記述するのに使うもの—————11語
- C その他—————1語

このアンケート調査の調査票を集計整理した結果、次のことを知ることができた。

- (1) プラスの評価で使うことが多い語よりも、マイナスの評価で使うことが多い語のほうが多い。
- (2) (1)に述べた事実は、語群別にみると、口数が多いを意味する語群で最も顕著である。次いで、話し・聞くがへたを意味する語群——同じょうずを意味する語群の順となる。そして、口数が少ないを意味する語群では、この事実は最も弱いものとなる。口数が少ないを意味する語群は、全体的にあって、マイナスの評価の選択肢支持率が話し・聞くがじょうずを意味する語群よりも低く、四つの語群の中で最低だったのである。
- (3) 同一の語群の中でも、語によって選択肢支持の傾向がかなり違う場合がある。つまり同一の語群に属する類義語でも、その語群が指し示す人間の性向をプラス・マイナスどちらの立場から評価するかという点で、評価の気持に質的な違いのある場合がある。また、同じプラスならプラス、マイナスならマイナスの立場から評価するにしても、そのプラス・マイナスの評価の全体的傾向に量的な違いのある場合がある。

(4) 世代間の比較をすると、相対的にいって、中・老年層は「口数が少ない」のほうに傾斜し、青年層は「口数が多い」のほうに傾斜している。

さて、わたしたちは、アンケート調査によって知り得た以上四つの事柄をどのように受けとめるべきであろうか。まず第一に、プラスの評価で使うことが多い語よりも、マイナスの評価で使うことが多い語のほうが多いという事実。これは、〔I〕で述べたセックスに関する形容詞性向語彙の調査結果とぴったり一致する。マイナスの評価で使うことが多い語のほうがなぜ多いかという理由も、もちろん〔I〕で述べたことで充分説明できる。

社会や集団の構成員がその社会や集団の提示した「期待される人間像」に違背する性向をもつこと。組織の維持と発展をはかる社会や集団にとってこれはまさに獅子身中の虫。これ以上に恐ろしいものはない。これは、セックスに関する性向の場合も言語活動に関する性向の場合も、その他の性向の場合も全く同じである。

日本人の伝統的な言語活動観を手っとり早く知るために、ここで再び明治時代の修身教科書を例にひこう。明治26年に発行された『修身女訓』（末松謙澄著 全4巻）は、当時の高等小学校女生徒用を目的として編纂された検定修身教科書であるが、女性の望ましい言語活動のありかたについて、その巻1には次のような教材がのせられている。（以下、下線は渡辺。）

第11 詞づかひを慎むべし

詞は心の花なりと云へば、詞によりて心ざまも知らる、慎むべし、言葉のなまめけるはいやらしく、角立てるはしきいらしし、只何となく耳たたず、和らかに愛らしくして、理屈ぶらぬこそよけれ、心あるものは目下のものにさへ、横柄には物いはぬものなり、まして目上の人にやしき詞して、よからんや、はしたなくいさかひなどせんは、聞くもいぶせく、取り分け生物知りに利口らしく語り出んは、かたはらいたし、慎みても又慎むべし。

同じようにその巻2には、次のような教材がのっている。

第10 言語を慎むべし

白珪の欠けたるは猶磨くべし、斯言の欠けたるは理むべからずとも古人は云へり、慎むべきは言語なり、古訓にも言葉少なきを女の徳とすと云へば、口重げなるも、口軽きよりまされり、他人の噂さを云ひ伝ふるなどのことは殊更慎むべし、一言の失より万事の破れも出で、身の榮譽にかかるものなり、たとひ己がよく心得たることなりとも、口さがなく差出がましきは、そば目もつらきものにて、人に疎まるる

本なり。されば女は殊に慎み深くして人にへりくだり、何事もひかえめにして、賢
ぶることなきこそよけれ、『日本教科書大系 近代編 第2巻』(P. 460～461)

このように、ことばは慎しむべし、ことばは少なきことをもって徳とす、……
という言語活動観・コミュニケーション観を教えこまれたのは、何も女生徒に
限ったことではない。〔I〕でも引用した『尋常小学修身書』（東久世通禧著
全4巻 明治25年）は、当時全国に普及した修身教科書の一つであって、もち
ろん男女児童に共通に使用された。その巻3には次のような教材がのっている。
日本の子どもは、当時男女の別を問わず、小学3年生にしてすでにこのような
言語活動観・コミュニケーション観の教育を国家によって与えられていたので
ある。

第7 慎言

第18課

身を修むる道は、第一に 言葉を少くするに在り。言葉多きときは、過ちも、亦
多かるべし。故に、人は、言葉を少くして、過ちなからむことを思ふべし。

舌三寸のさへづりに、五尺の身をはたす。 和漢古諺
人のこといはんより、ひちあかおとせ。 浅瀬のしるべ

第19課

我が知りたる事も、問ふ人なくば、みだりにいふことなかれ。われより、好みて、
知りたる事をほこるは、善からぬことなり。

問ふ人ありとも、我が知らざる事は、かならず、いふことなかれ。我が知らざる
事を、知りたるやうに いひなすは、禍をまねく本なり。

口は、これ、禍の門、舌は、これ、禍の根。 童子教

貝原益軒は、筑前の人にて、名高き学者なりき。ある年、京都より 筑前に帰る
とき、船にのりて行きけるに、のりあひの人々、互に、名を知らざれども、いろい
ろの話をしたり。其の中に、一人の少年ありて、人々を見下し、物知りかほに、書
物の講釈をなせり。益軒、其のかたはらに在りて、少しも物いはず、謹みきくこと、
字を知らぬ人の如くなりき。やがて、船、岸につきければ、人々、互に、其の姓名、
住所を告げけるに、少年、はじめて、益軒先生なることを知り、みづから、前の大
言をはちて、遂に、其の名も告げず、ひそかに、たち去りたり。（『日本教科書大
系 近代編 第2巻』P.504～505）

ことわざをみても、言語活動に関する日本のことわざの中には、おしゃべり
をさげすんだものやいましめたもの、また、「言うな。」といましめたものは、
たいへん多い。しかし、その反対に「言え。」とすすめたことわざは、非常に少
ない。

A おしゃべりをさげすんだ（・いましめた）ことわざ、「言うな。」といま
しめたことわざ
ことば多きは、品少なし。
枝葉のしげりに、実少なし。
多弁、能なし。
口あいて、人に食われる柘榴かな。
口あけて、五臓の見ゆる蛙かな。
口は禍の基。
口は禍の門、舌は禍の根。
禍は口より生ず。
禍は多言より大なるはなし。
鞆走りより口走り。
口ゆえ身を果す。
口から高野に行く。
口から生れて、口で果てる。
吐いた唾は呑めぬ。
口は、出入りに戸を立てよ。
口を閉じ、目を開け。
口を以て鼻とせよ。
口と禪は固く緊めよ。
口と財布は緊めるが得。
言わぬは、言うにまさる。
言わぬことばは、言う百倍。
物は言い残せ、菜は食いのこせ。
口数は少ないほどよい。
沈黙は黄金である。
饒舌は銀、沈黙は金。
話しじょうずよりも聞きじょうず。
話しじょうずの聞きべた。

B おしゃべりの状態をさげすんだ形容

笹の葉に鈴。

竿の先に鈴。

ひばりの口に鳴子。

藁を焚く。

C 「言う」ことをすすめたことわざ

思うこと言わねば、腹ふくる。

黙っていては、損をする。

言わぬことは、聞こえぬ。

言わぬが損。

言語活動に関する形容詞的性向語彙の全体を通じて、(1)プラスの評価で使うことが多い語よりもマイナスの評価で使うことが多い語のほうが多い、という事実があること。そして、この事実は、(2)語群別にみると、口数が多いを意味する語群で最も顕著であり、口数が少ないを意味する語群で最も顕著でなくなること。アンケート調査によって知り得たこれらの事実は、まさに上で見てきたような日本人の言語活動観・コミュニケーション観を反映し、その上になかったものといえるだろう。

世代間の比較をすると、相対的にいって、中・老年層は「口数が少ない」のほうに傾斜し、青年層は「口数が多い」のほうに傾斜していると認められる、という第4の調査結果。これは、第1や第2の調査結果ほどにははっきりしたものではない。しかし、これも今日世代と世代の間にみられる広汎な価値観の断絶、またはずれの一つの側面を反映したものとして受けとめるべき事柄である。口数は、ただやみくもに少ないことをもってよしとする伝統的な価値観は、もはや戦後の民主主義的な教育を受けた若い世代には、次第に色あせたものへ変化しようとしていることを示しているのだ。

戦後、戦前の修身教育に代わって登場した道徳教育についてみると、たとえば昭和33年改訂の小学校学習指導要領では、「道徳的心情を高め、正邪善悪を判断する能力を養うように導く」という教育目標に関係が深い指導内容として、具体的に次のような項目があげられている。(以下、下線は渡辺。)

- (8) 自分の正しいと信ずるところに従って意見を述べ、行動し、みだりに他人の意見や行動に動かされない。

(低学年においては、自分の考えをはっきり述べることや自分の考えを持って行動することを指導し、中学年・高学年においては、さらに、みだりに他人に動かされないことなどを加えて内容とすることが望ましい。)

また、「民主的な国家・社会の成員として必要な道徳的態度と実践的意欲を高めるように導く。」という教育目標に関係が深い指導内容として、次のような項目もあげられている。

- (30) 権利を正しく主張するとともに、自分の果すべき義務は確実に果す。

(低学年・中学年においては、自分の果すべきことは確実に果すことを指導の中心とし、高学年においては、さらに、権利を正しく主張することや、権利と義務との関連を考えることなどを加えて内容とすることが望ましい。)

わたしのアンケートに回答してくれた青年層、つまり大学生の諸君は、彼らが昭和30年代に受けた小学校の教育活動を通じて、このようなきわめて積極的な言語活動観・コミュニケーション観を植えこまれてきた。少なくとも植えこまれることが国家によって期待されてきたのである。

同じ昭和33年改訂の小学校学習指導要領では、国語科教育における聞くこと・話すことの指導目標や内容を、たとえば第6学年の場合、次のように規定している。

〔第6学年〕

1 目標

- (1) 聞くこと話すことによって生活を高め充実していくようにする。
- (2) 判断しながら聞くことができるようにする。
- (3) 効果的に話すことができるようにする。

2 内容

- (1) 次の事項について指導する。
 - ア 人の言うことを尊重して聞くこと。
 - イ 事実と意見を区別して聞き分けるように努める。
 - ウ 話の順序を決めて話すこと。
 - エ 相手や場にふさわしい話し方をする事。
 - オ 正しいことばづかいで話すこと。
- (2) 次の各項目に掲げる活動を通して、上記の事項を指導する。
 - ア 話合いや会議に参加する。
 - イ 説明をする。

- ウ 報告をする。
- エ 発表をする。

上に示す活動のほか、「放送を聞く」「劇などをする」「校内放送をする」なども望ましい。

大学生である青年層の若い世代は、このような指導要領にもとづいて、話す・聞くの積極的な言語活動教育を小学校から中学・高校へと一貫して受けてきたのである。したがって、明治の修身教科書によって代表される戦前・戦中の、消極的な言語活動教育を受けてきた中・老年層の世代との間に、すでに報告したような価値観のギャップが存在するのは、当然のことといえるだろう。

最後に、同一の語群の中でも、語によって選択肢支持の傾向がかなり違う場合がある、という第3の調査結果について。同一の語群にはいる類義語でも、その語群が指し示す人間の性向をプラス・マイナスどちらの立場から評価するかという点で質的な違いのあること。また、同じプラスならプラス、マイナスならマイナスの立場から評価するにしても、そのプラス・マイナスの評価に全体的にみて量的な違いのある場合があること。このことは、これらの類義性向語彙のもつニュアンスの違い、それにもとづく使い分けの問題に関して、一つの問題を提示したことになる。

たとえば、中・老年層と青年層の二つの世代を通じてみられる「ロガ軽イ・オシャベリナ・饒舌ナ・多弁ナ」の4語と「ロガメナ」の間にみられる違い。「話シジョーズナ・聞キジョーズナ・能弁ナ・雄弁ナ」の4語と「ロガ達者ナ・ロジョーズナ・口巧者ナ・口八丁ノ」の4語の間にみられる違い。「ロガ重イ・無ロナ・寡黙ナ」と「ダンマリ」の間にみられる違い。そして、青年層における「ロガ軽イ・オシャベリナ」と「饒舌ナ・多弁ナ」の間にみられる違いなどなど。

〔記〕

(1) 55ページ以下で報告したセックスに関する形容詞性向語彙の場合と同じく、この性向語彙も夫婦の間で回答がどの程度一致し、どの程度くいちがっているか、を見てみよう。

昭和45年6月20日までに、64組の御夫婦から回答をいただいた。そこでこの64組に限って、上記のことを調べてみると、102ページと103ページの表に示す

ような結果になった。

表中各欄の数字は、64組全体に対する百分比。(B)欄の「回答のくいちがい」には、次の20の組合せが一括されている。(この20の組合せについて一つ一つ報告するのは省略する。)

つまり夫婦の支持した選択肢の組合せが、 $- + \cdot + - \cdot - \pm \cdot - 0 \cdot - ? \cdot + \pm \cdot + 0 \cdot + ? \cdot \pm - \cdot \pm + \cdot \pm 0 \cdot \pm ? \cdot 0 - \cdot 0 + \cdot 0 \pm \cdot 0 ? \cdot ? - \cdot ? + \cdot ? \pm \cdot ? 0$ であるものは、すべて(B)欄に一括されている。

64組の夫婦の回答は、それぞれの夫婦間でどの程度一致しているか。

	(a) 口数が多い を意味するもの				(b) 口数が少ない を意味するもの				(e) 其他
	口 ガ 軽 イ	オ シ ヤ ベ リ ナ	饒 舌 ナ	多 弁 ナ	口 マ メ ナ	口 ガ 重 イ	無 口 ナ	寡 黙 ナ	
(A) 夫婦ともア(-)の選択肢	%	%	%	%	%	%	%	%	%
回答が一致	95.3	79.7	78.1	46.9	10.9	4.7	3.1	20.3	29.7
"イ(+)"				1.6	4.7	10.9	1.6		60.9
"ウ(中)"		1.6		1.6	6.3	15.6	10.9	3.1	3.1
"エ(0)"				1.6	1.6	12.5	23.4	10.9	7.8
"オ(?)"			3.1		3.1			3.1	1.6
小計	95.3	81.3	81.2	50.1	26.6	43.7	39.0	37.4	42.2
(B) 回答がくいちがいない	3.1	14.1	10.9	46.9	67.2	54.7	59.4	57.8	56.3
(C) 双方または片方が無答	1.6	4.7	7.8	3.1	6.3	1.6	1.6	4.7	1.6
(A) — (B)	92.2	67.2	70.3	3.2	-40.6	-11.0	-20.4	-20.3	-14.1
									34.4
									1.6
									29.6

(続き)

	(c) 話し・聞くがじょうずを意味するもの							(d) へたを意味するもの			
	話シヨーズナ	聞キシヨーズナ	能弁ナ	雄弁ナ	口ガ達者ナ	口シヨーズナ	口巧者ナ	口八丁ノ	話シベタナ	口ベタナ	トツ弁ナ
(A) 夫婦ともア(-)の選択肢	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
回答が一致	60.9	81.3	3.1	42.2	14.1	50.0	32.8	29.7	29.7	23.4	10.9
"イ(+)"	3.1	28.1	3.1	4.7	3.1	3.1	7.8	10.9		1.6	3.1
"ウ(+)"			3.1	1.6	17.2	7.8	1.6	1.6	4.7	4.7	1.6
"エ(0)"			4.7			1.6	1.6				15.6
"オ(?)"							43.8	42.2			1.6
小計	64.0	81.3	39.0	48.5	34.4	62.5	50.0	56.3	34.4	29.7	32.8
(B) 回答がくいちがい	34.4	18.8	56.3	50.0	62.5	37.5	6.3	1.6	64.1	70.3	65.6
(C) 双方または片方が無答	1.6	62.5	4.7	1.6	3.1	25.0	-6.2	-14.1	1.6	-40.6	1.6
(A) — (B)	29.6		-17.3	-1.5	-28.1				-29.7		-32.8

この表から、たとえば次のことなどがわかる。

(1) (a)欄で「口が軽イ・オシャベリナ・饒舌ナ」は、夫婦間の一致の度合いが非常に高い。これに対して、「多弁ナ・ロマメナ」は一致の度合いが低い。とりわけ「ロマメナ」は非常に低い。この語は、21語全体の中でも、一致の度合いが最も低い。使用の意識が人によってたいへんくいちがっている語であることがわかる。

(2) (d)欄の「話シベタナ・ロベタナ・トツ弁ナ」は、総じて他の(a)(b)(c)(e)欄の語よりも一致の度合いが低く、くいちがいの度合いが高い傾向にある。話し・聞くがへたを意味するこの(d)欄の語は、夫婦の間でも意見が大きく割れるものようだ。

(2) 第22問と第23問に対する回答が、夫婦の間でそれぞれどれだけ一致しているか。それを示したのが下の二つの表である。各欄の数字は、64組全体に対する百分比。

第22問の回答は、夫婦の間でどれだけ一致しているか

夫 婦 の 回 答 の 組 合 せ		
(A) 夫多 婦ほ うが 好き	夫婦とも口数の多いタイプのほうが 好き	0%
	” ” ” より嫌いでない	4.7
	夫は口数の多いほうが好き、妻は多いほうが より嫌いでない	1.6
	” ” より嫌いでない、 ” 好き	1.6
	小 計	7.9
(B) 夫ほ 婦と もが 少好 ない	夫婦とも口数の少ないタイプのほうが 好き	18.8
	” ” ” より嫌いでない	3.1
	夫は口数の少ないほうが好き、妻は少ないほうがより嫌いでない	9.4
	” ” より嫌いでない、 ” 好き	10.9
	小 計	42.2
(C)	夫婦ともどちらともいえない	9.4
	(A) + (B) + (C)	59.5
(D)	く い ち が い	37.6
(E)	双方またはどちらかが無答	3.0

第23問の回答は、夫婦の間でどれだけ一致しているか

回答の組合せ		
(A) 夫多 婦多い タイプ もブ	夫婦とも 口数が多いタイプだ	0
	〃 〃 まあ口数が多いタイプのほうだ	3.1
	夫は 多いタイプだ、妻は まあ多いタイプのほうだ	1.6
	夫はまあ多いタイプのほうだ、妻は多いタイプだ	1.6
	小 計	6.3
(B) 夫少 ない タイプ もブ	夫婦とも 口数が少ないタイプだ	0
	〃 〃 まあ口数の少ないタイプのほうだ	17.1
	夫は少ないタイプだ、妻はまあ少ないタイプのほうだ	3.1
	夫はまあ少ないタイプのほうだ、妻は少ないタイプだ	1.6
	小 計	21.8
(C) 夫婦とも どちらともいえない	1.6	
(A) + (B) + (C)		29.7
(D) く い ち が い	67.3	
(E) 双方または片方が無答	3.1	

第22問で夫婦の回答がくいちがっているのは、全体の37.6%であるのに、第23問で夫婦の回答がくいちがっているのは67.3%もある。夫婦の間で自分の性格についての判断がくいちがっているのが非常に多いのである。これは、夫婦の性格そのものがくいちがっていて、そのために判断もくいちがっているということなのか。それとも、性格はくいちがっていないのに、判断だけがくいちがっているということなのか。これだけではわからない。ともかくこの限りでは、言語活動の面からみた問題の性格について、「似た者夫婦」ということは、とてもいえないようだ。(もっともこの「似た者夫婦」でないということが、あるいは夫婦の一般的な姿なのかも知れない。)

いっぽう、他人は口数の多いタイプのほうが好きか、少ないタイプのほうが好きか、ということになると、夫婦とも少ないほうが好きだ、というのが最も多くなる(42.2%)。夫婦とも口数の多いほうが好きだ、というのはわずか7.9%しかいないのである。

夫婦ともに自分は口数が少ないタイプだと判断しているのは、夫婦ともに自分は口数が多いタイプだと判断しているものよりもかなり多い（前者が21.8%、後者が6.3%）。

第23問の(D)夫婦のくいちがいが67.3%の中には、下のA・B・C・D・E・Fの六つのくいちがいのパターンが含まれている。

A型（夫は口数が多く、妻は口数が少ない）

く い ち が い の 組 合 せ		
夫 は 口 数 が ～	妻 は 口 数 が ～	
多 い タ イ プ	少 な い タ イ プ	0 %
〃	ま あ 少 な い タ イ プ の ほ う	3.1
ま あ 多 い タ イ プ の ほ う	少 な い タ イ プ	3.1
〃	ま あ 少 な い タ イ プ の ほ う	9.3
計		15.5

B型（夫は口数が少なく、妻は口数が多い）

く い ち が い の 組 合 せ		
夫 は 口 数 が ～	妻 は 口 数 が ～	
少 な い タ イ プ	多 い タ イ プ	1.6 %
ま あ 少 な い タ イ プ の ほ う	〃	1.6
少 な い タ イ プ	ま あ 多 い タ イ プ の ほ う	6.3
ま あ 少 な い タ イ プ の ほ う	〃	12.5
計		22.0

C型（夫は口数が多く、妻はどちらともいえない）

く い ち が い の 組 合 せ		
夫 は 口 数 が ～	妻 は 口 数 が ～	
多 い タ イ プ	ど ち ら と も い え な い	4.7 %
ま あ 多 い タ イ プ の ほ う	〃	7.8
計		12.5

D型（夫はどちらともいえない，妻は口数が多い）

く い ち が い の 組 合 せ		
夫は口数が～	妻は口数が～	
どちらともいえない	多いタイプ	1.6%
〃	まあ多いタイプのほう	6.3
計		7.9

E型（夫は口数が少なく，妻はどちらともいえない）

く い ち が い の 組 合 せ		
夫は口数が～	妻は口数が～	
少ないタイプ	どちらともいえない	1.6%
まあ少ないタイプのほう	〃	7.8
計		9.4

F型（夫はどちらともいえない，妻は口数が少ない）

く い ち が い の 組 合 せ		
夫は口数が～	妻は口数が～	
どちらともいえない	少ないタイプ	0%
〃	まあ少ないタイプのほう	0
計		0

A型とB型，C型とD型，E型とF型は，それぞれ正反対のくいちがいの型を示す。このうちA型とB型とでは，B型のほうが多いということは注意すべきことだと思う。また，C型（12.5%）とD型（7.9%）の開きよりも，E型（9.4%）とF型（0%）の開きのほうが大きいということも，同じ意味でやはり注意すべきだと思う。

昭和48年2月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3-9-14
電話 東京 (900)3111(代表)

UDC 301:809.56-3

NDC 361.6

本書の市販品発行所
〔〒162〕 東京都新宿区納戸町40 (03)260-5281
株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 <small>—白河市および付近の農村における—</small>	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 <small>—用法と実例—</small>	〃	700円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 <small>—現代語の語彙調査—</small>	〃	500円
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 <small>—鶴岡における実態調査—</small>	〃	600円
6	少 年 と 新 聞 <small>—小学生・中学生の新聞への接近と理解—</small>	〃	180円
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	200円
8	談 話 語 の 実 態	〃	品切れ
9	読 み の 実 験 的 研 究 <small>—音読にあらわれた読みあやまりの分析—</small>	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前編) <small>—現代語の語彙調査—</small>	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後編) <small>—現代語の語彙調査—</small>	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	400円
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	品切れ
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) <small>—対話資料による研究—</small>	〃	800円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	550円
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) <small>—総記および語彙表—</small>	〃	1,000円
22	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2) <small>—漢字表—</small>	〃	1,000円
23	話 し こ と ば の 文 型 (2) <small>—独話資料による研究—</small>	〃	品切れ
24	横 組 の 字 形 に 関 す る 研 究	〃	350円
25	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3) <small>—分析—</small>	〃	1,000円
26	小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達	明治図書刊	2,100円
27	共 通 語 化 の 過 程 <small>—北海道における親子三代のことば—</small>	秀英出版刊	品切れ

28	類 義 語 の 研 究	〃	750円
29	戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活	〃	400円
30-1	日 本 言 語 地 図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日 本 言 語 地 図 (2)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-3	日 本 言 語 地 図 (3)	〃	〃
30-4	日 本 言 語 地 図 (4)	〃	8,000円
30-5	日 本 言 語 地 図 (5)	〃	9,000円
31	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	〃	250円
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (II) —新聞の用語用字調査の処理組織—	〃	450円
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(II)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(III)	〃	700円
40	送 り が な 意 識 の 調 査	〃	1,500円
41	待 遇 表 現 の 実 態 —松江24時間調査資料から—	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(III)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円
45	幼 児 の 読 み 書 き 能 力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(IV)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(V)	〃	700円
50	幼 児 の 文 構 造 の 発 達 —3～6才児の場合—	〃	1,000円

国立国語研究所資料集

1	国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語 彙 調 査 —現代新聞用語の一例—	〃	品切れ
3	送 り 仮 名 法 資 料 集	〃	〃
4	明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目	〃	300円
5	沖 繩 語 辞 典	大蔵省印刷局刊	品切れ
6	分 類 語 彙 表	秀英出版刊	1,100円
7	動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集	〃	1,700円
8	現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中間報告)	〃	500円

国立国語研究所論集

1	こ と ば の 研 究	秀英出版刊	品切れ
2	こ と ば の 研 究 第2集	〃	750円
3	こ と ば の 研 究 第3集	〃	800円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	13	昭和36年度	160円
2	昭和25年度	〃	14	昭和37年度	220円
3	昭和26年度	160円	15	昭和38年度	250円
4	昭和27年度	品切れ	16	昭和39年度	品切れ
5	昭和28年度	240円	17	昭和40年度	250円
6	昭和29年度	200円	18	昭和41年度	300円
7	昭和30年度	品切れ	19	昭和42年度	300円
8	昭和31年度	220円	20	昭和43年度	350円
9	昭和32年度	200円	21	昭和44年度	400円
10	昭和33年度	品切れ	22	昭和45年度	400円
11	昭和34年度	〃	23	昭和46年度	450円
12	昭和35年度	350円			

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和39年版	品切れ
昭和30年版	〃	昭和40年版	1,100円
昭和31年版	〃	昭和41年版	1,100円
昭和32年版	〃	昭和42年版	1,100円
昭和33年版	〃	昭和43年版	品切れ
昭和34年版	〃	昭和44年版	1,500円
昭和35年版	550円	昭和45年版	1,500円
昭和36年版	800円	昭和46年版	2,000円
昭和37年版	品切れ	昭和47年版	2,200円
昭和38年版	〃		

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	品切れ

**BASIC STUDY ON THE RELATION
BETWEEN SOCIAL STRUCTURE
AND LANGUAGE (3)**

**TEMPERAMENT VOCABULARY AND
OUTLOOK ON VALUE**

CONTENTS

Foreword

Study on the Relation between Outlook of
Value of Temperament and Temperament
Vocabulary (1)

- 1 On the Case of Adjective Temperament
Vocabulary of Sex
- 2 On the Case of Adjectival Temperament
Vocabulary of Language Activity

**THE NATIONAL LANGUAGE
RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO
1973**